北支

昭和十四年七月四日第三種郵便物認可 昭和十六年九月十五日印刷納本
昭和十六年十月一日發行（毎月一回一日發行）第二十九號

黄土地帯を行く列車

北京の東北方、燕山山脈の黄土層を行く列車。この山脈にも部分的に黄土層があり、日本の段々畠のやうに、よく耕されてゐる。寫眞下方の河は潮河の上流で、これを遡ると古北口に至る

Darting Through the Yellow Earth

收穫

廣大な北支が語られ、肥沃な黄土が傳へられ、農業國支那が美しく描かれる收穫の時期に、北支約七千萬の農民の多くは、飢餓に苦しむ。小麥や雜穀、棉花や煙草の收穫が貧しいと言ふので

政治の混亂、生産の萎縮が惡循環して支那社會の苦難を極めた運命がある。事變處理はこの惡循環を遮斷することを目標に持つ。過剩人口と土地の集約化については生産技術の改善が、貧農

はない。餘りにも厖大な人口があり、産業の未發達が原因なのである。十年九災と言ひ、收穫の不如意が常態である。農民大衆の生活苦と社會不安と、

層の救濟には農村の販賣、信用機構の改善が農民の切なる希ひである時、新民會や華北交通の情熱的な農村指導は愈〻力強く展開する

高脚踊り・農村といはず都會といはず、おめでたいとき
は必ずこの道化役者が出て街中の人氣をさらつてしまふ

愛路祭

華北交通社訓の一項に「善隣協和ノ大義ヲ宣揚スヘシ」がある。これは同社創立の精神であり、日華十一萬社員が公私を問はず日夜實踐躬行しつゝある大義である。しかも、單に社員のみならず同社が農村厚生と交通路愛護を目的として經營する八千ケ村の愛路村に浸透し有形無形に具現されてゐる民族興隆の指導理念である

愛路祭もその實踐事項の一つ。毎年四月十八日は「善隣協和之日」として全北支蒙疆の愛路村が一齊に愛路節を開催し、三千萬村民が日華友好と提携を一層徹底するため講演、座談會や公私生活の反省を行ふ。またこの日には會社側から日用品廉賣、施療施藥、映畫演藝、運動會などを提供し、文字通り親善の一日を過す

たのしく、おごそかな新しい年中行事である

Festival of the Railway Protection Corps

鐵路局で設けた見物席の子供達

愛路少年隊の夏季鍛錬——北戴河——

Training for Leadership

指導者教育

日本でも漸く指導理念の問題が各方面で論議されるやうになつたが、硝煙未だ消えざる現地では事變直後から鋭意民生工作に努力し、之が實踐を通じて着々その實を擧げつつある。即ち華北交通の愛路村民の指導者たるべき青少年、婦女子の養成がそれである

鐵道、自動車、水運各沿線三千萬愛路村民の民心は動もすれば敵共産軍得意の宣傳と脅迫によつて動搖する懼れがある、從つてここでは武器なき思想の鬪爭がなされつつあるのである。それだけに愛路村工作の消長は北支の治安は勿論、日本國防に影響すること甚大である。華北交通が愛路村を通じて北支の農村民の思想工作に懸命の努力をつづけつつある所以もここにある。將來の愛路村民を指導するものは現地の人間でなければならぬ。この意味で今あらゆる角度から錬成され訓育されつつある愛路青・少年隊、同婦女隊の成果は注目さるべきである

愛路婦女隊の造花講習

子供

冷粉賣りは北京の胡同から胡同を叫び歩く、子供等は院子（庭）の奥深くゐてもその聲を聽きのがさない。そして母へ五分（五錢）ねだるのである。冷粉とはそばに芝麻醬（胡麻みそ）をかけたもの

―北京にて―

Children

子供達が寄つて來た。
「さて、をぢさんがいいものを見せてやるぞ。いいか待つてをれよ」
子供達はカメラのレンズから何か飛び出すだらうと信じてゐたのに
——隴海線にて——

天壇にて

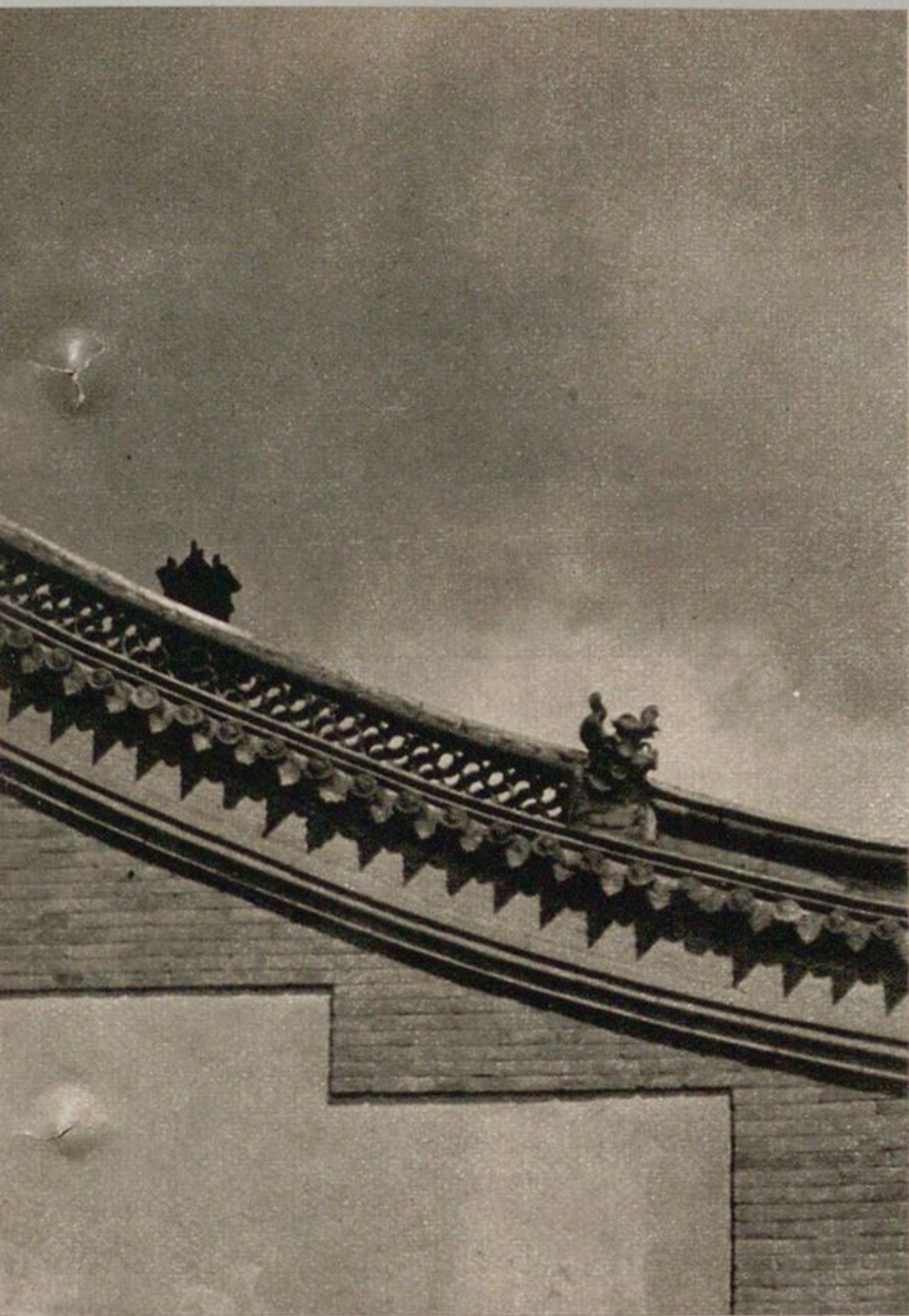
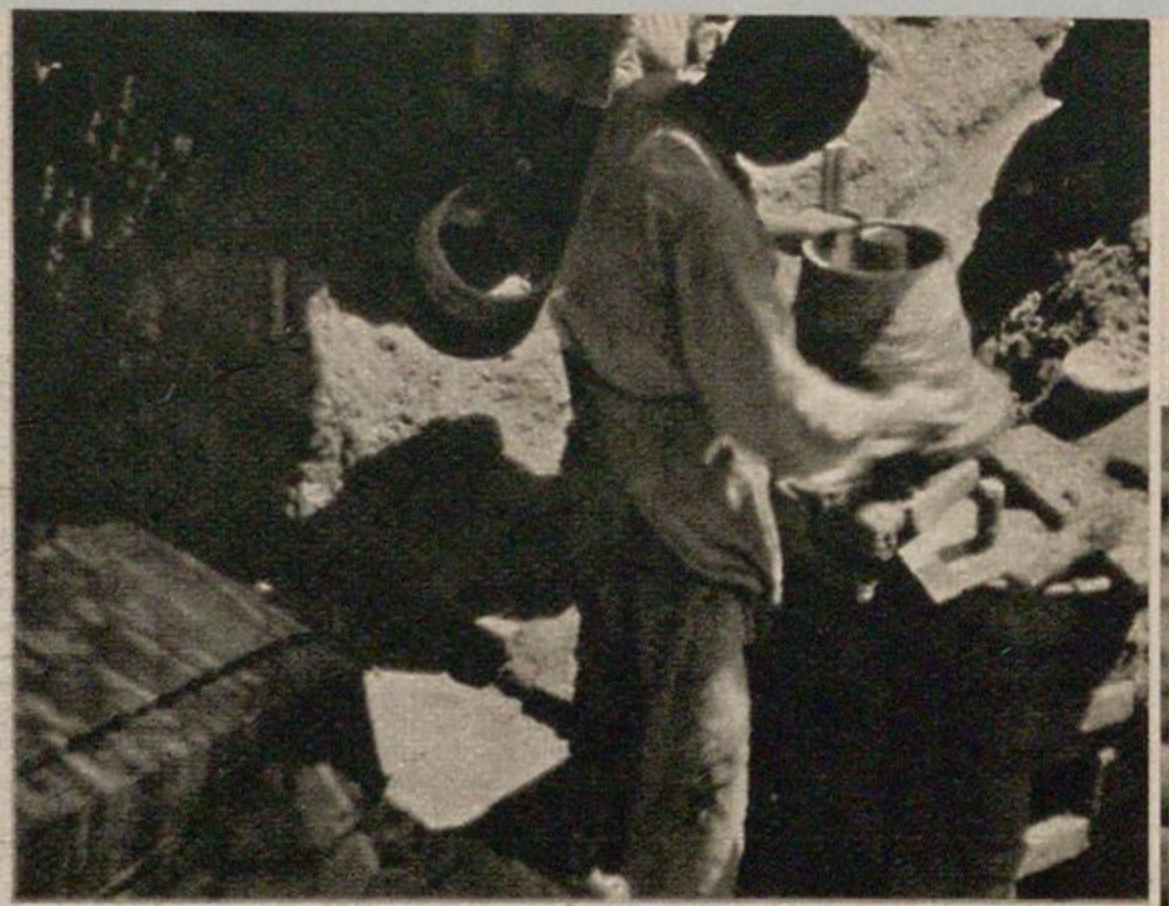
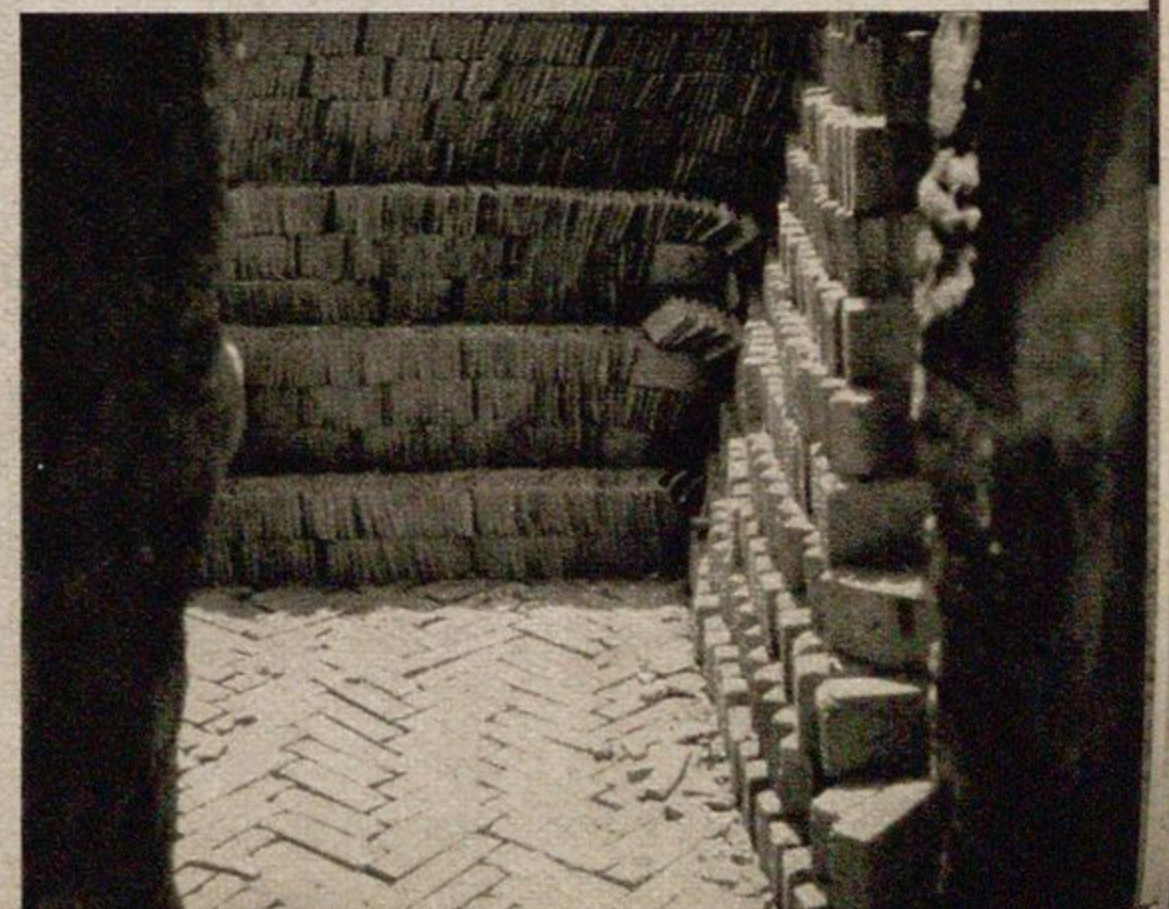
大理石で造られてゐる圜丘

祈年殿

Temple of Heaven

Mecca of the Peking Tourists

瓦

瓦は屋根

A Chinese Tile-Kiln

支那の瓦は「古史攷」によれば、「夏の桀の時、昆吾氏瓦を作る」とあるから支那では既にその頃から瓦があつたものと考へられる。これを形體上から種別すると、平瓦、丸瓦、棟飾瓦、塼とし、また素燒と釉薬をかけたものとに大別出來る

此處に紹介するのは日本で云ふ敷平瓦に相當するもので、現今最も一般的に最も多量に使はれてゐる平瓦である

1、粘土をこねて帶狀に延ばし、丸い輪型に卷きつけて天日に乾す
2、輪型は四つに折れるやうになつてゐて、それを外すと瓦は四つに割れる
3、乾　燥
4、窯の內部、煉瓦も一緒に燒く
5、出來あがり

1

2

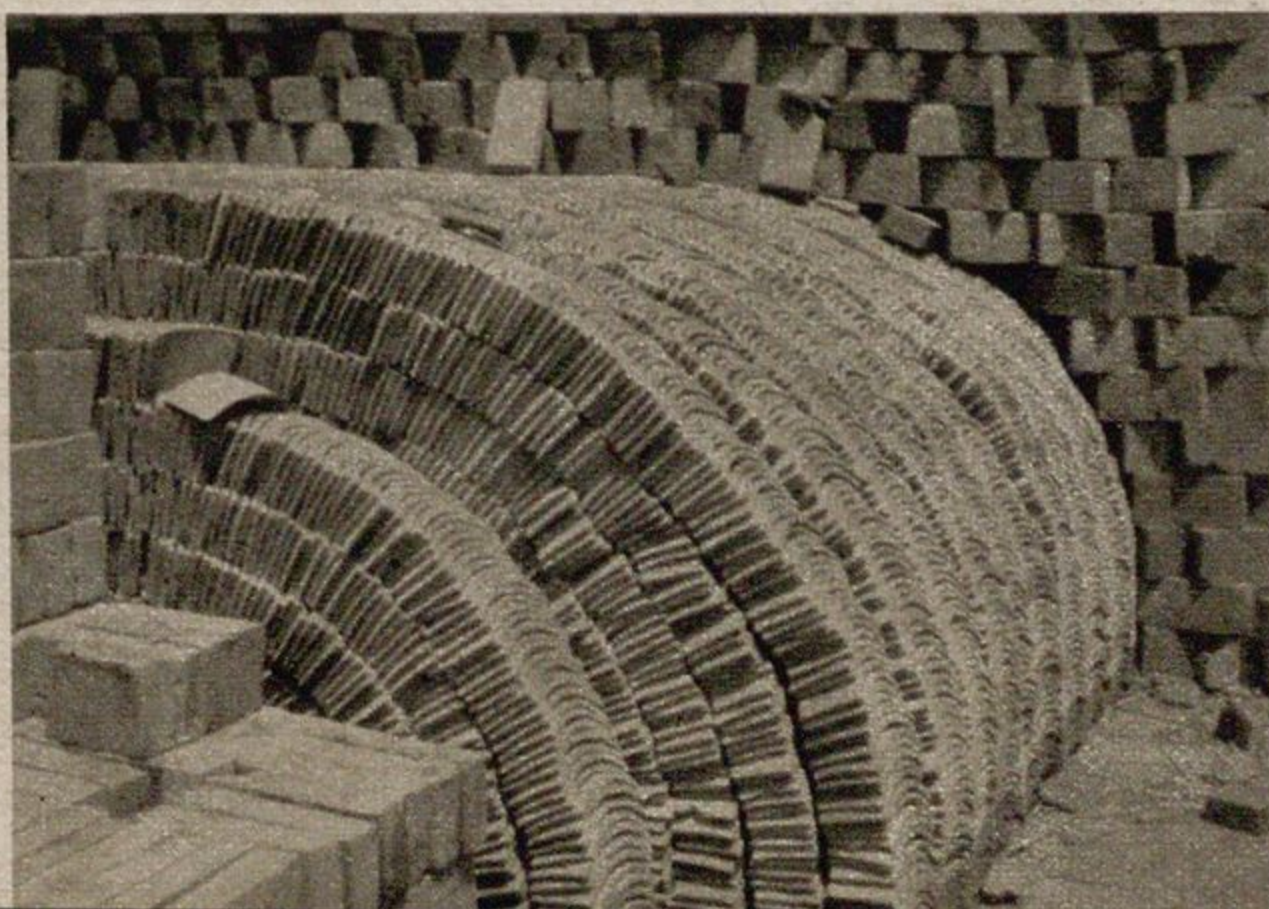
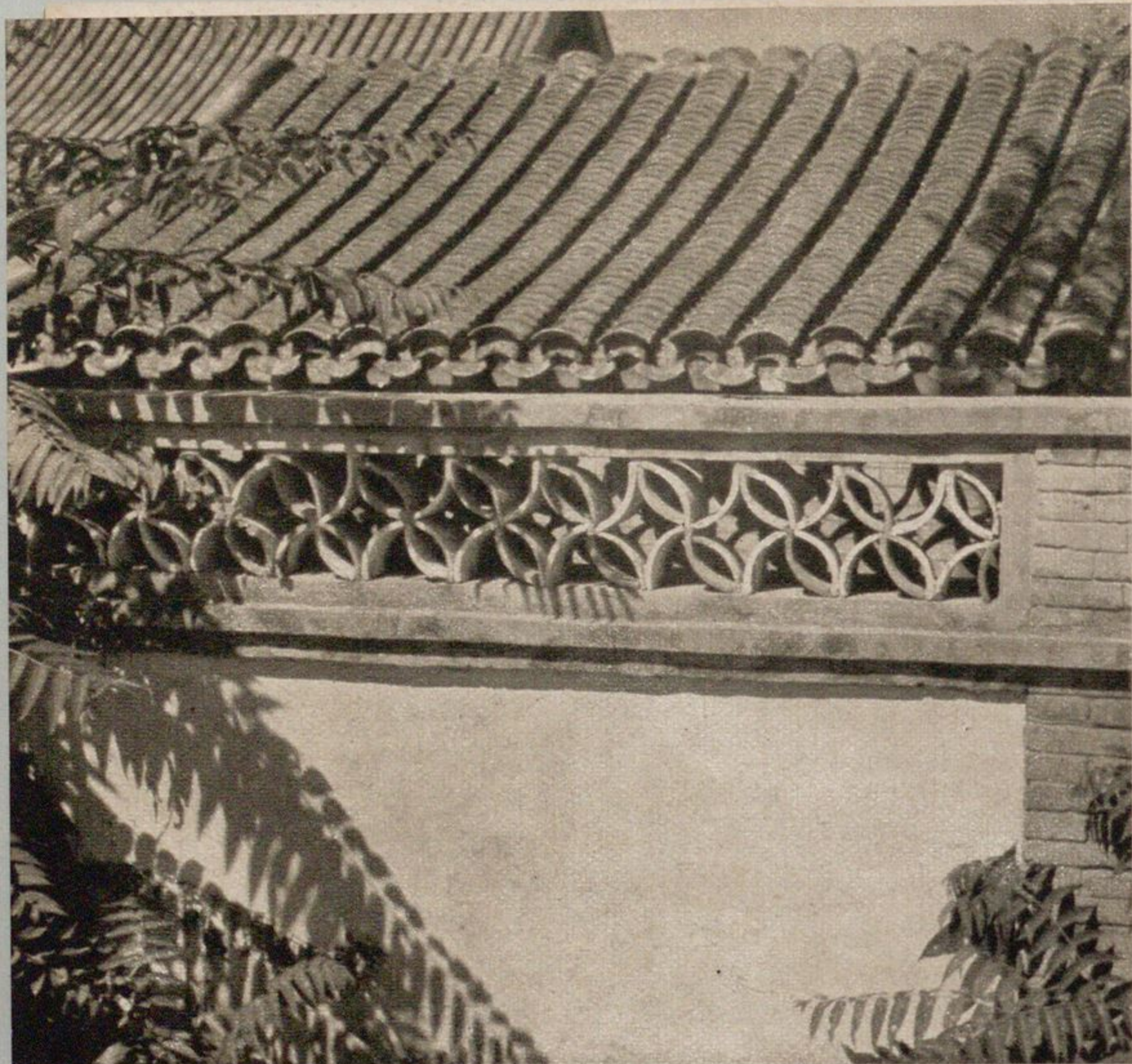
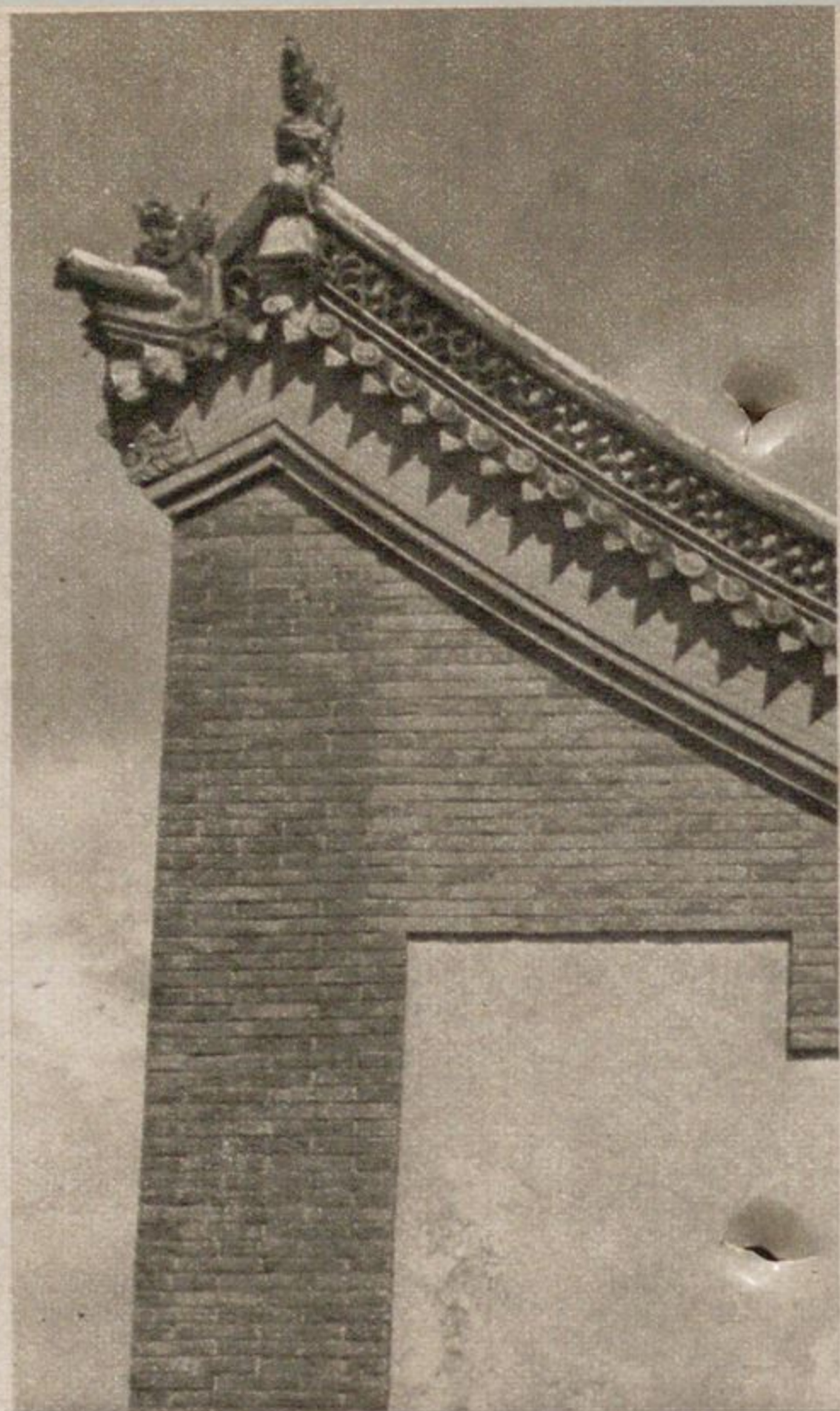
3

5

4

瓦で造つた壁の裝飾と屋根

を葺くだけでなく、壁の裝飾にも使つてゐる

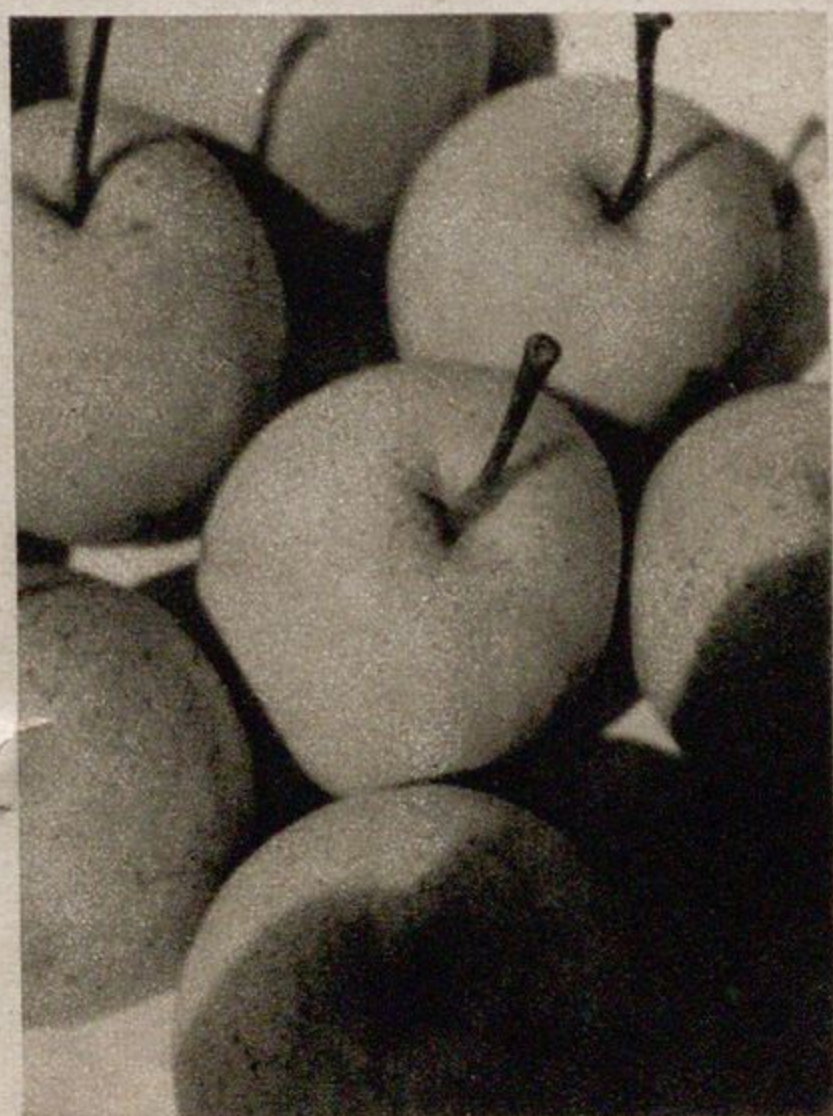
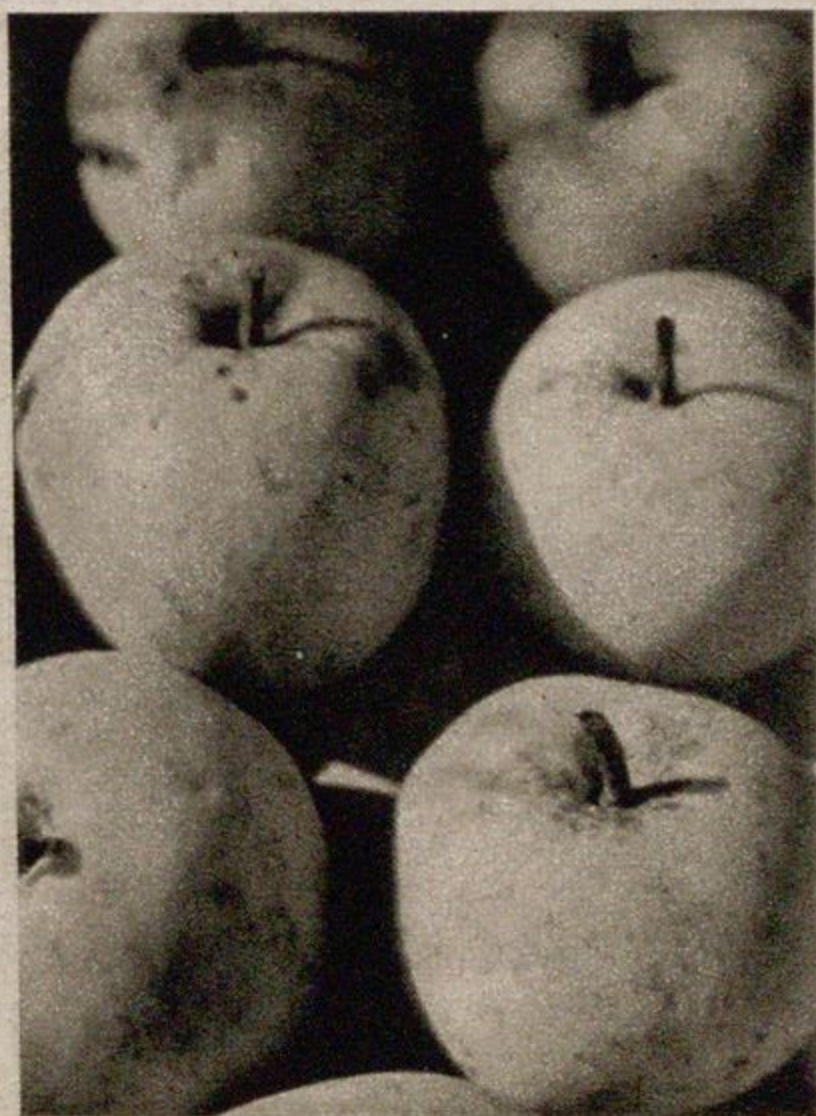
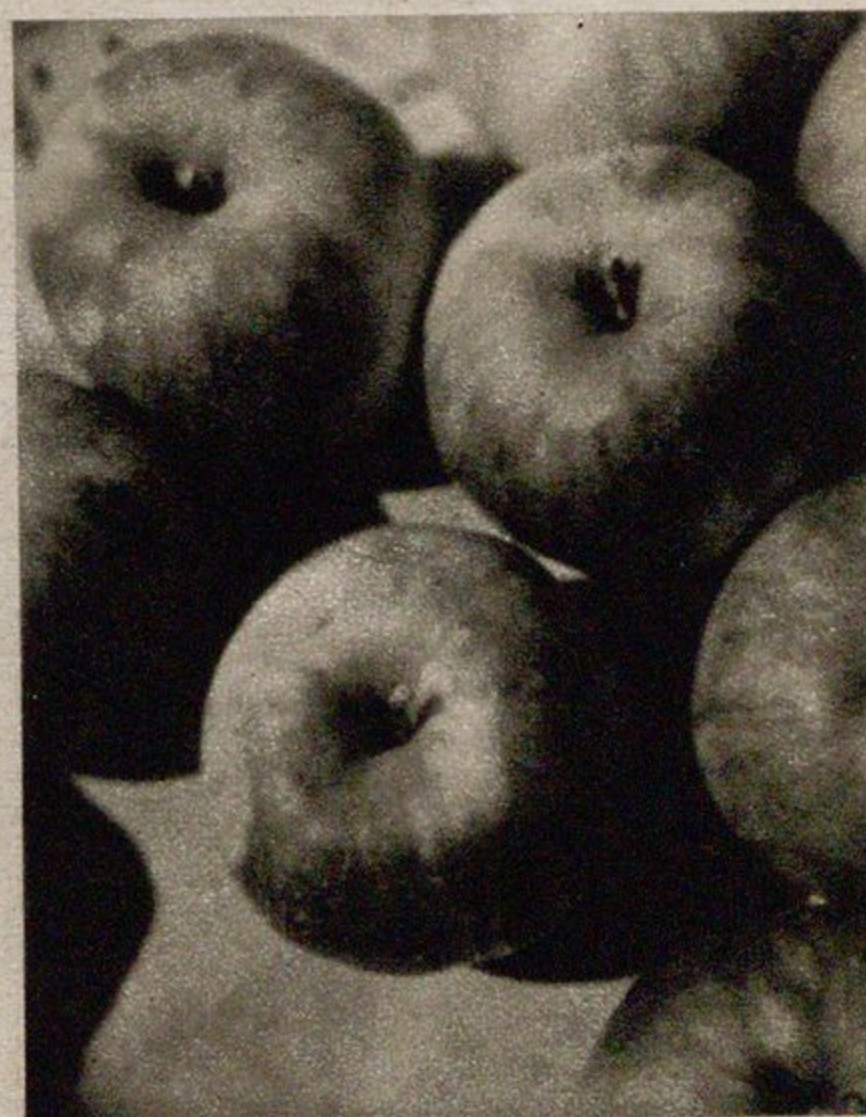
窯場には貯水池が絶對に必要である

北支のくだもの

葡萄・林檎・梨

昌黎園藝試驗場に於ける歐洲種葡萄の試作

Fruits of the Season

北支は果樹の國である。にもかかはらず、從來の果樹は自然任せの作り方、折角よい風土をもちながら、北支では立派な果物の稔りを見ることが出來なかつた。先進日本の農業技術はここにも提携の手をさしのべて、果樹の改良に協力をしつつある。現在華北交通で經營してゐる昌黎の園藝試驗場はこれである。日本の技術で改良された果實が、北支の市場に顔を出すのもさう遠くはあるまい

梨畑

蜜梨

酥梨

林檎・紅玉

歐洲種・ダツチエルベクルート

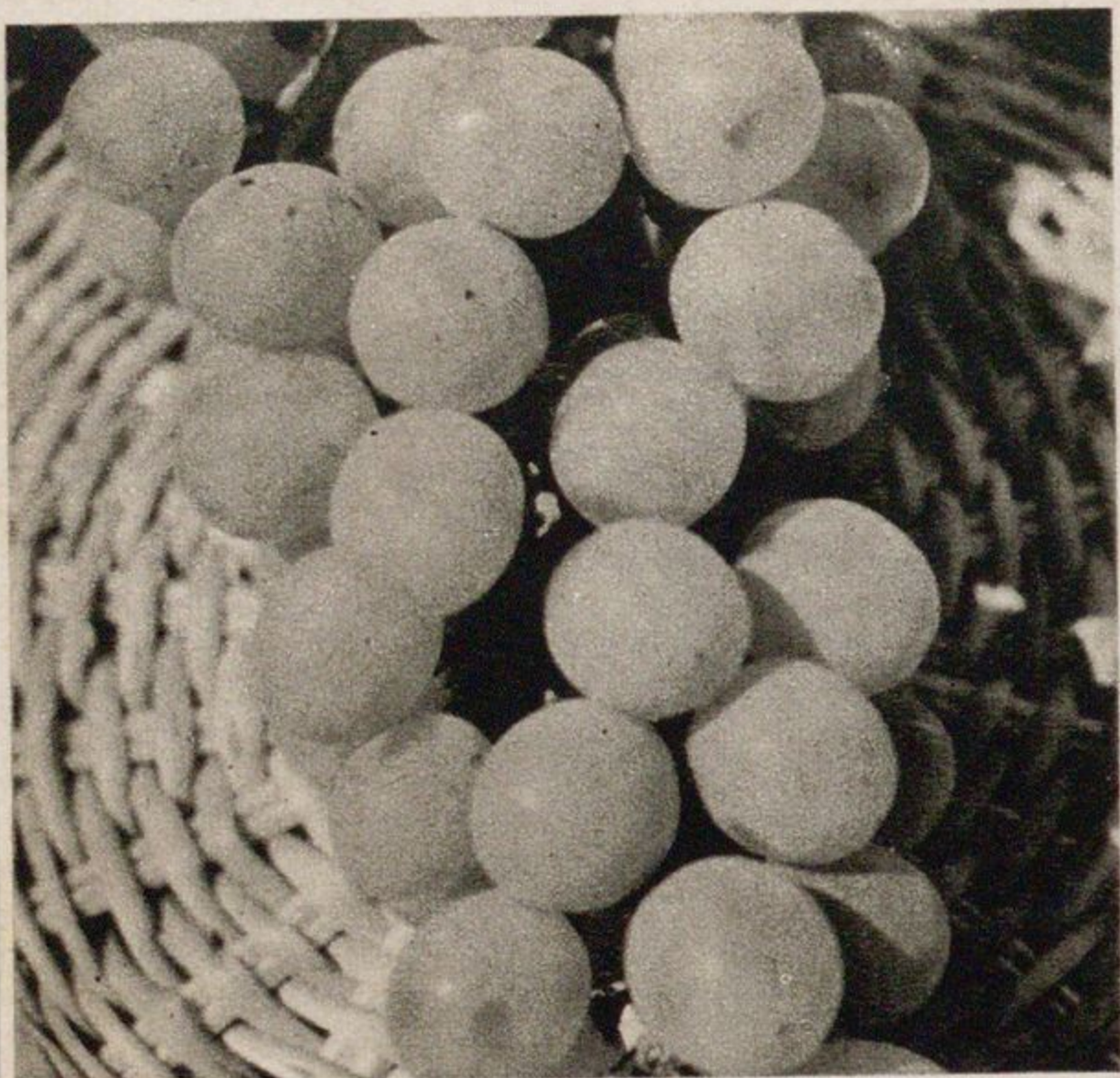
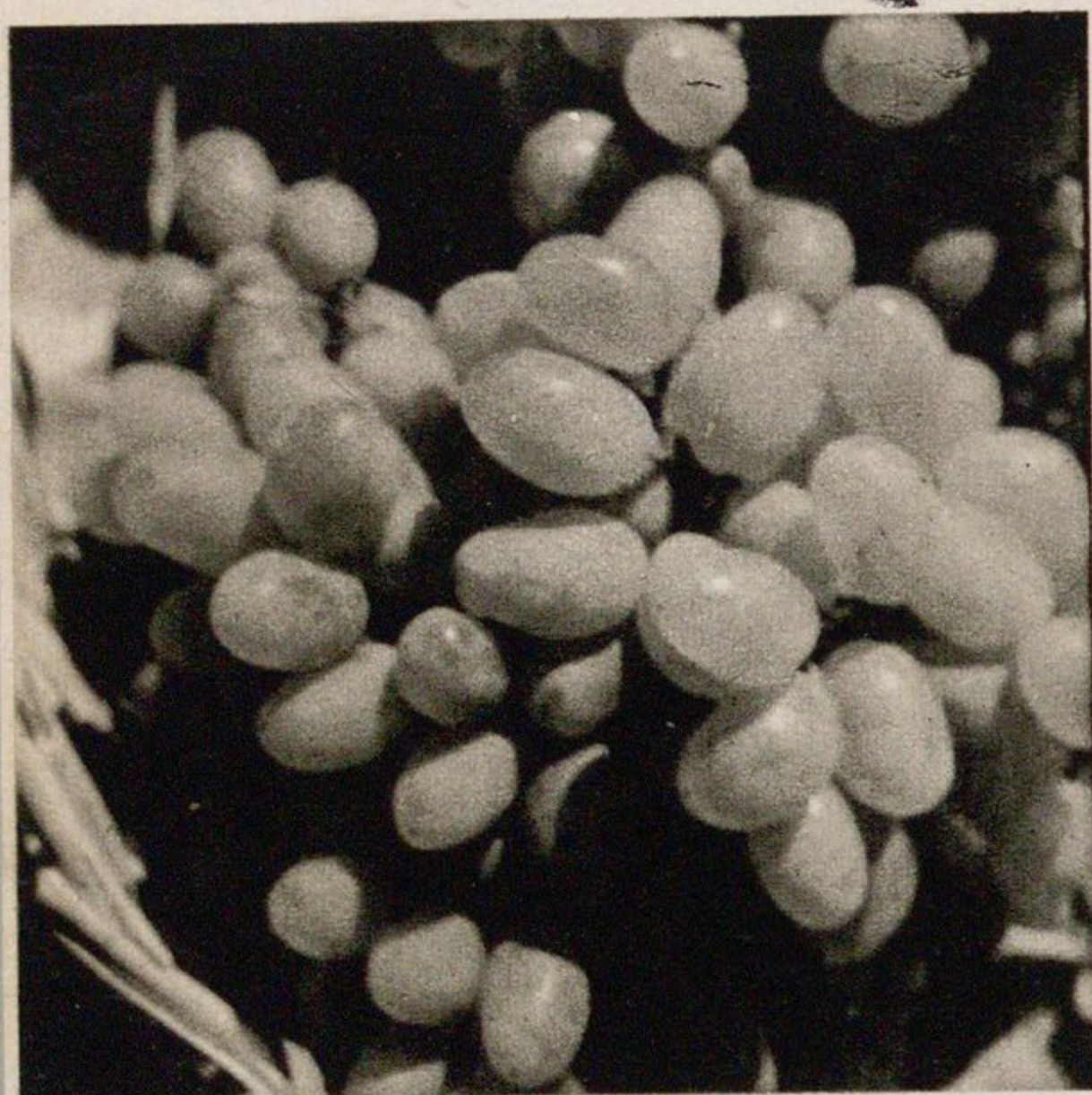
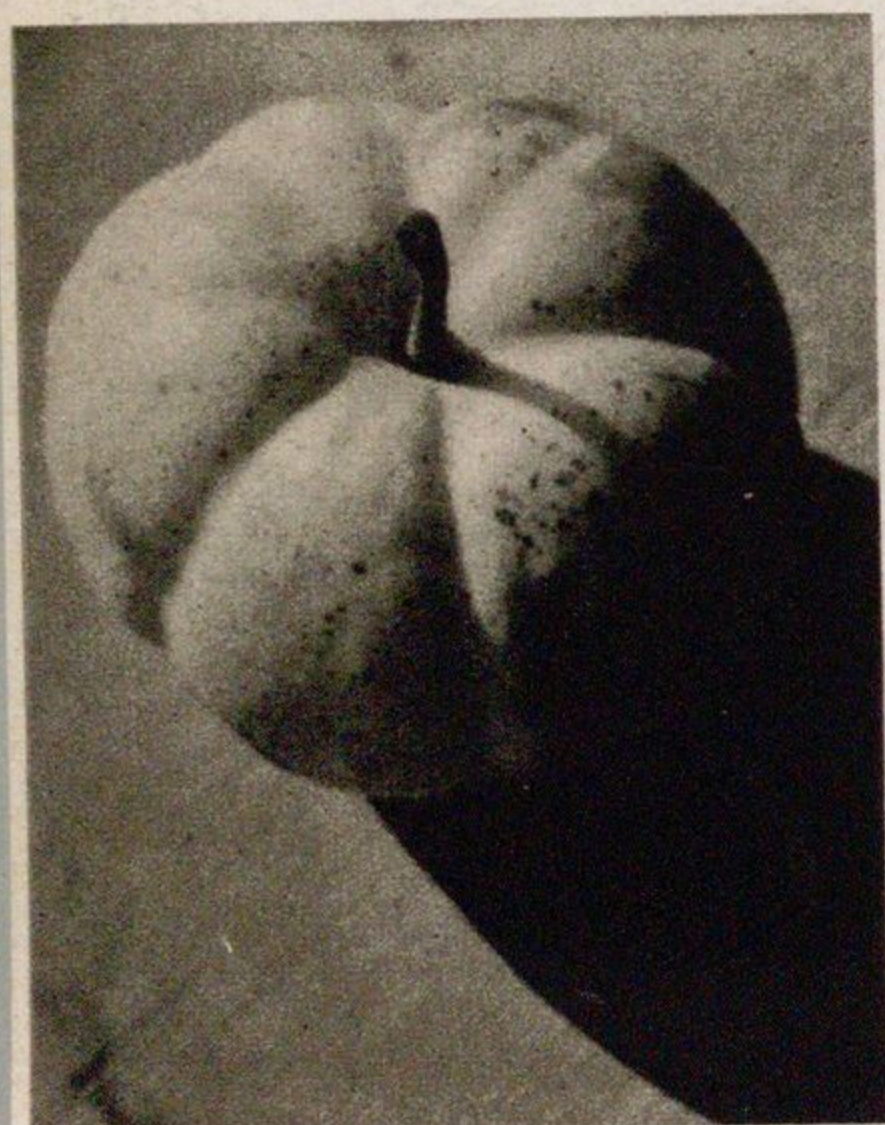
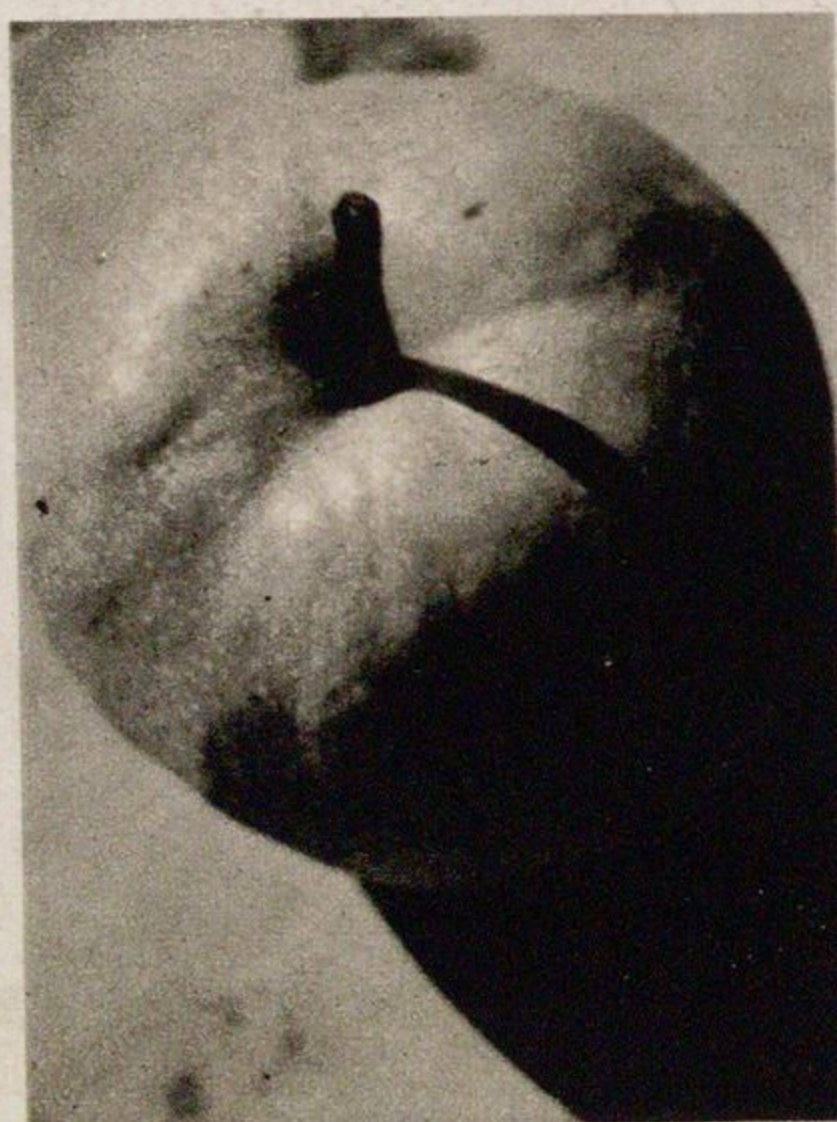
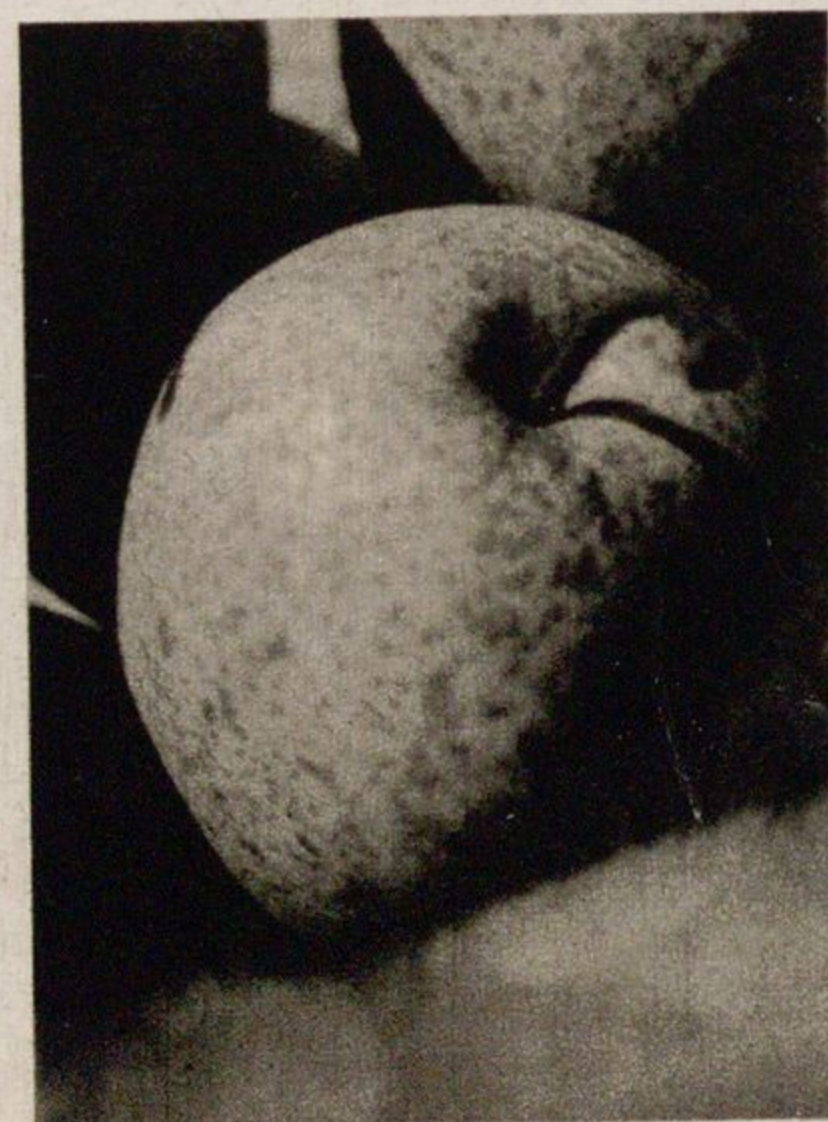
歐洲種・マスカツトハムブルグ・玫魂香

支那產・牛　心

歐洲種・ブラツクハムブルグ

日本種・國　長

日本種・今　村　梨

半　斤　酥　梨

中秋節

The Mid-Autumn Festival

月亮東　圓似燈
一層一層　往上升
多燒香　多供酒
一家大小　慶一宵

月亮斜　中秋節
又吃月餅　又供兎兒爺
穿新襪　換新鞋
也跟奶　也跟姐
上趟前門　趟逛街

東の空にお月様まるい
　お燈籠みたいね
段々高いよ
お線香たんと焚いて
お酒もたんとあげて
みんな仲良くお祝ひしましよ

お月様高い　中秋節は
お餅をたべよ　兎様にも上げよ
靴下かへて　靴かへて
母様　姉様　御一緒に
前門散歩に出かけましよ

天も地も人も玲瓏として秋はくまなく訪れて來ました。北京の子供等がうたふ童謠の一節はよく中秋の愉しさを傳へたものです。赫々たる夏の日に伸び切つた樹木の枝葉が静かな影を落し、のつぼりと大きな月がのぼります

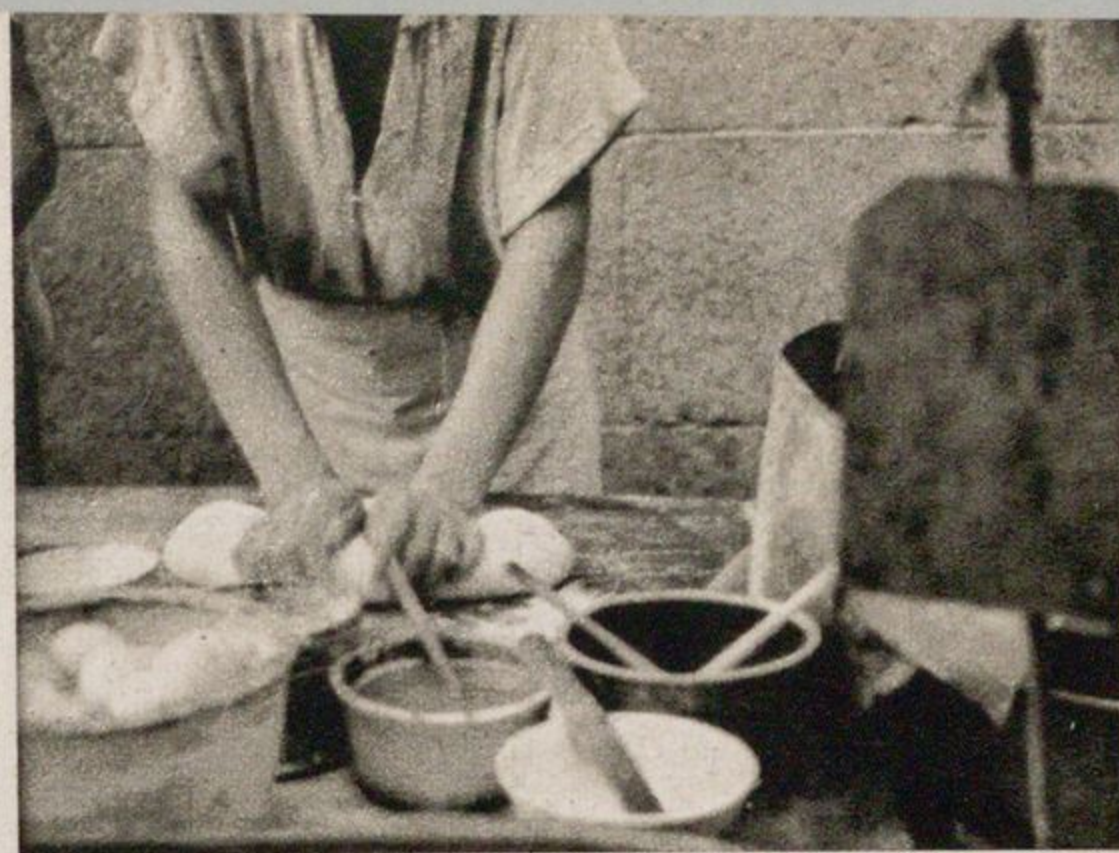
寫眞の右は、中秋節のお祭に子供等がままごとに飾る兎兒爺（粘土製極彩色の兎の人形）中秋前になると街頭に賣出される

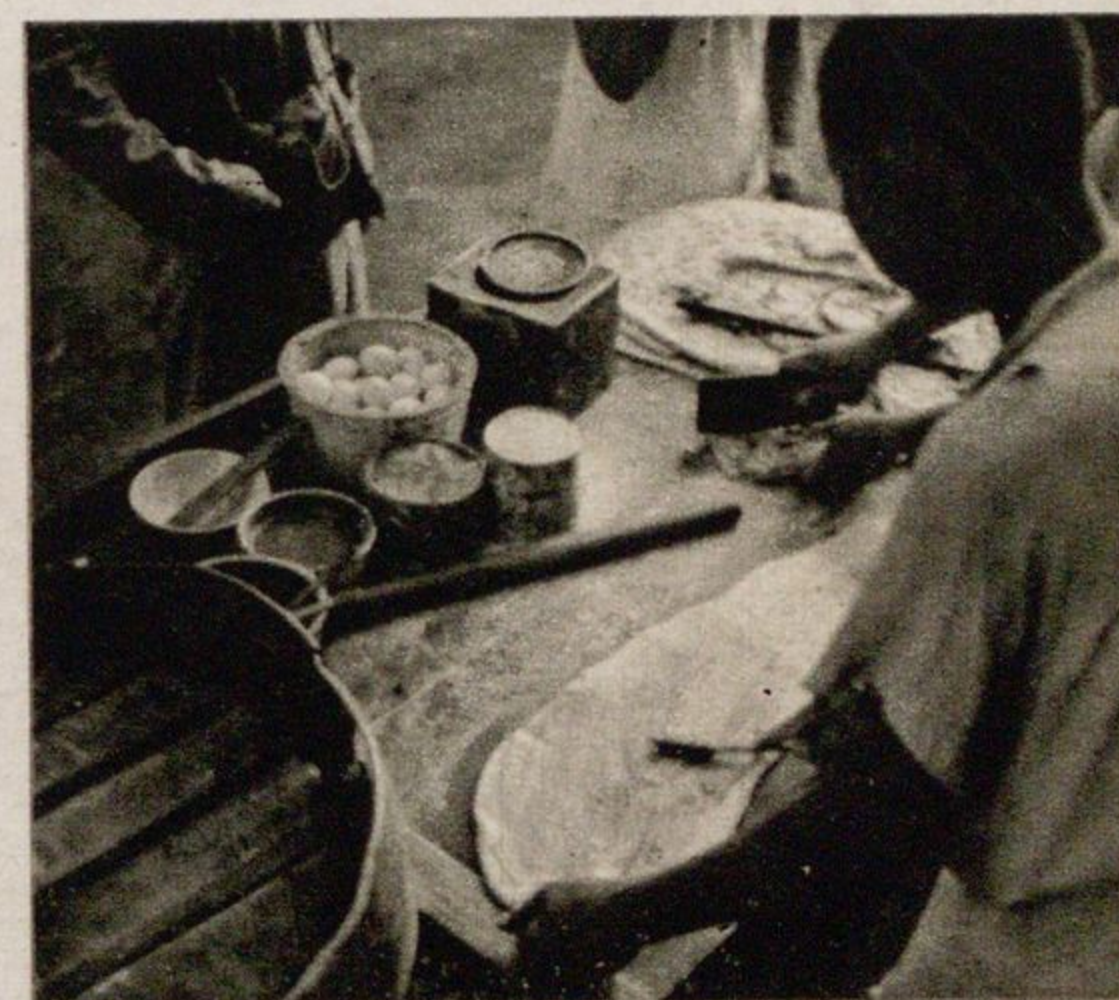
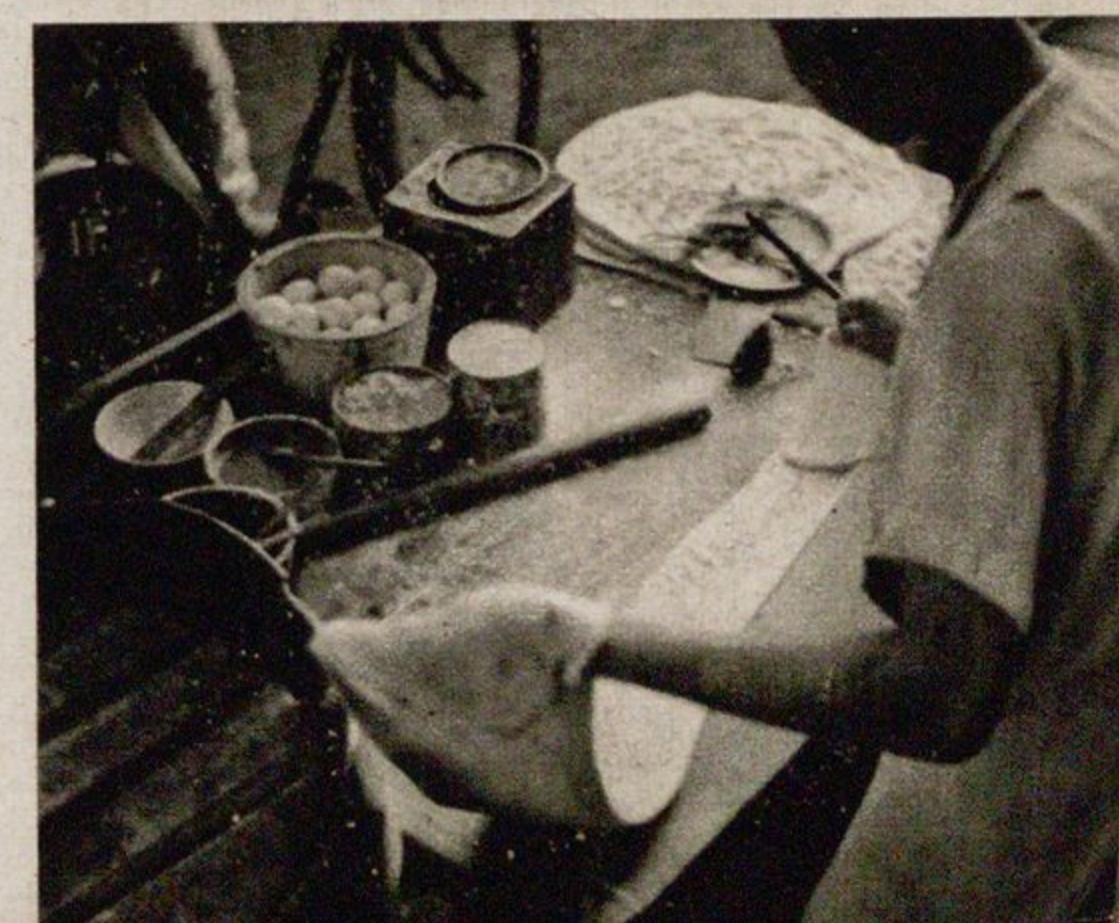
左は中秋節の夜の院子（中庭）風景、月光馬（月神像）の祭壇を圍んで一家團欒のところ

烙餅のつくりかた

支那で餅（ピーン）といふのは日本でいふ餅（もち）のことではありません。原料はメリケン粉で、それをこねて圓く平たくのして、フライパンで炒つたもののことをいふのであります

その造り方や大きさは混ぜるものによつて、色々な名稱があり、味も違ひます。例へば、肉をあんこに使つたものを肉餅（ローピン）と云ひ、刻んだ葱などを入れたものを葱花餅（ツォンホアピン）と云ひます。それからあづき餡や砂糖など使つたのを糖餅（タンピン）といふふうに種類は甚だ澤山あります

Process of Baking the "Lao-Ping" Bread

1

2

3

4

何れも支那ではこれが主食、或は主食兼副食物になつてゐます

ここにはそれ等の中で基本とも考へられる烙餅(ラオピン)のつくり方を披露致しませう

原料のメリケン粉に水を注いでよく練り、さうして寫眞に示すやうな順で

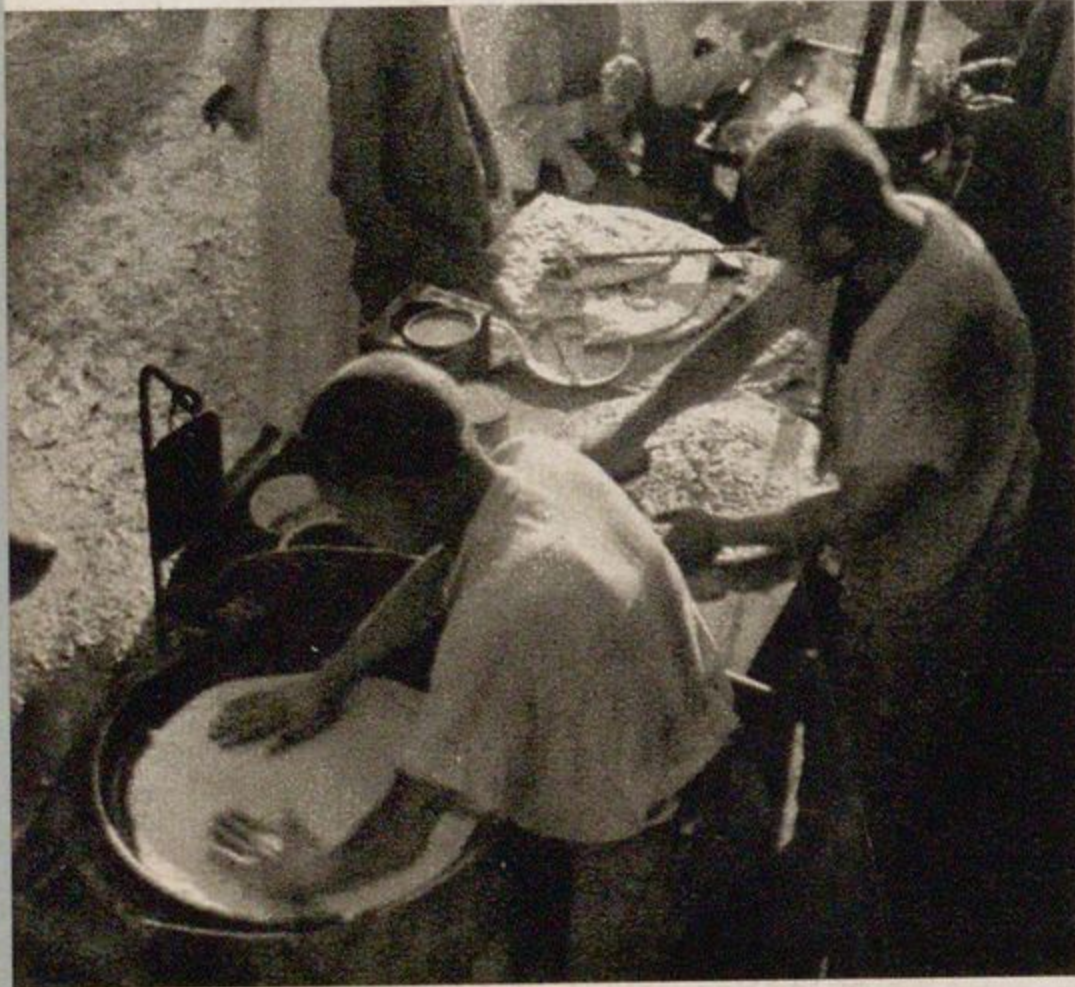
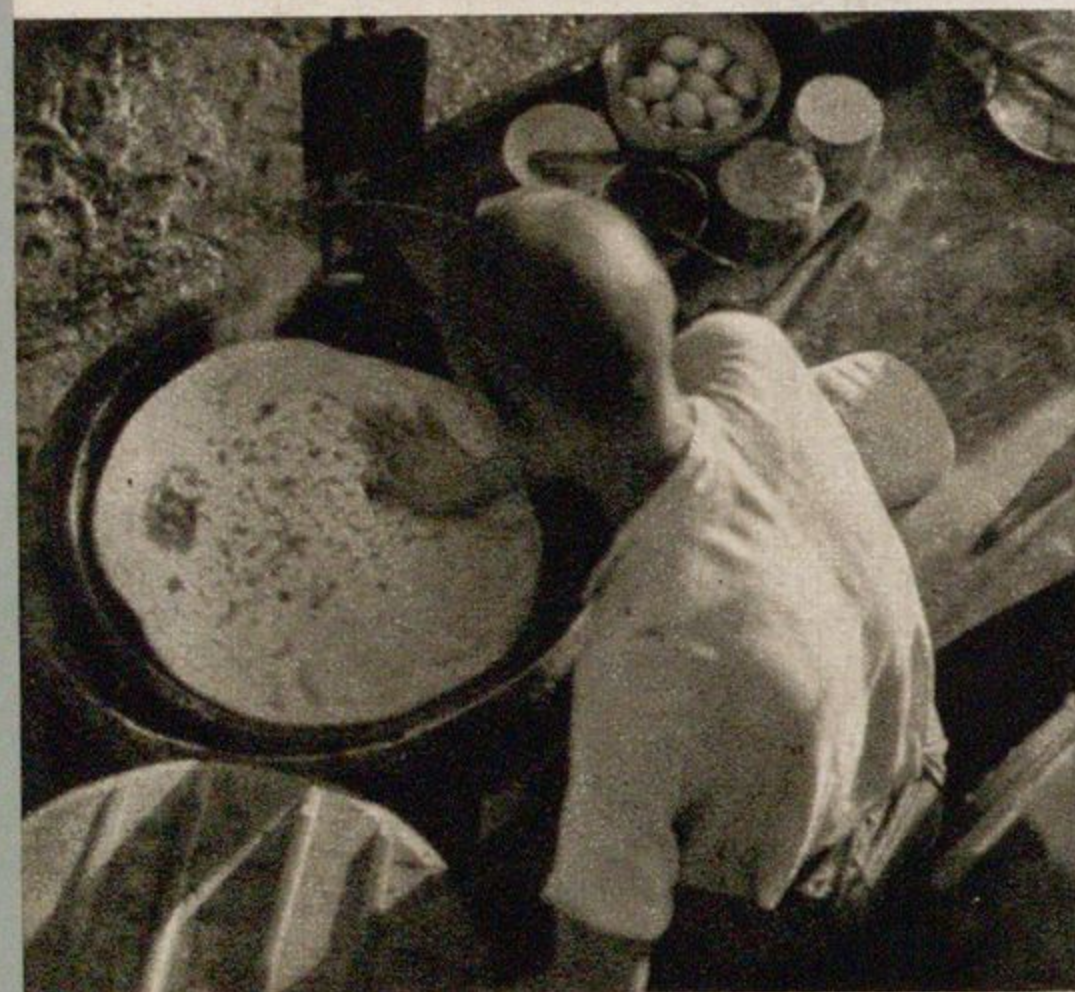
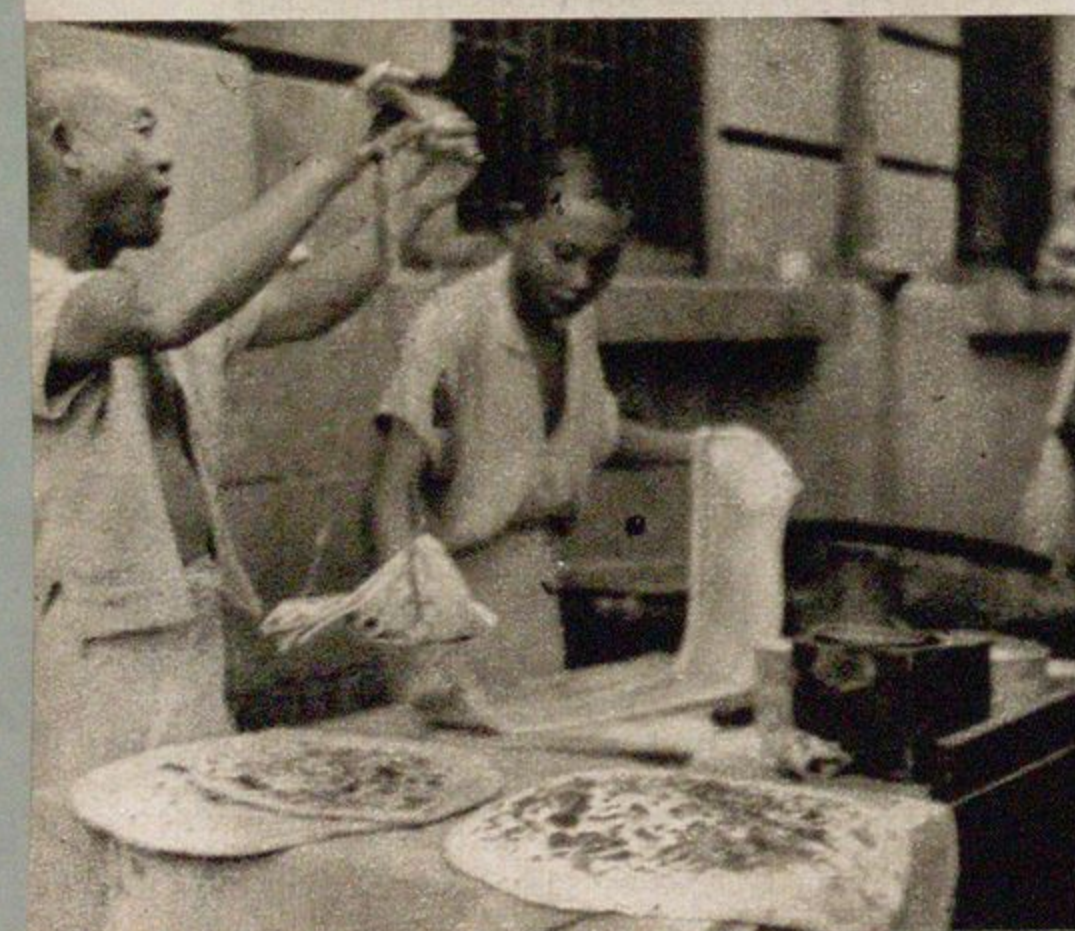
①練れたら、任意の大きさにちぎる
②それをすりこぎの如き棒で延ばして
③胡麻油を塗つて、塗つた方を内側にしてくるくると卷いて
④更に又棒で延ばし、油を塗る、これを數回繰返す
⑤さうして圓く延ばす
⑥すきやき鍋のやうなものに適當に油を塗つておいて
⑦焦げないやうに注意が肝要です
⑧支那ではそれを目方で切り賣りします。吾々もお辨當の代りによく食べます。必ずあたたかい中に食べること

5

6

7

8

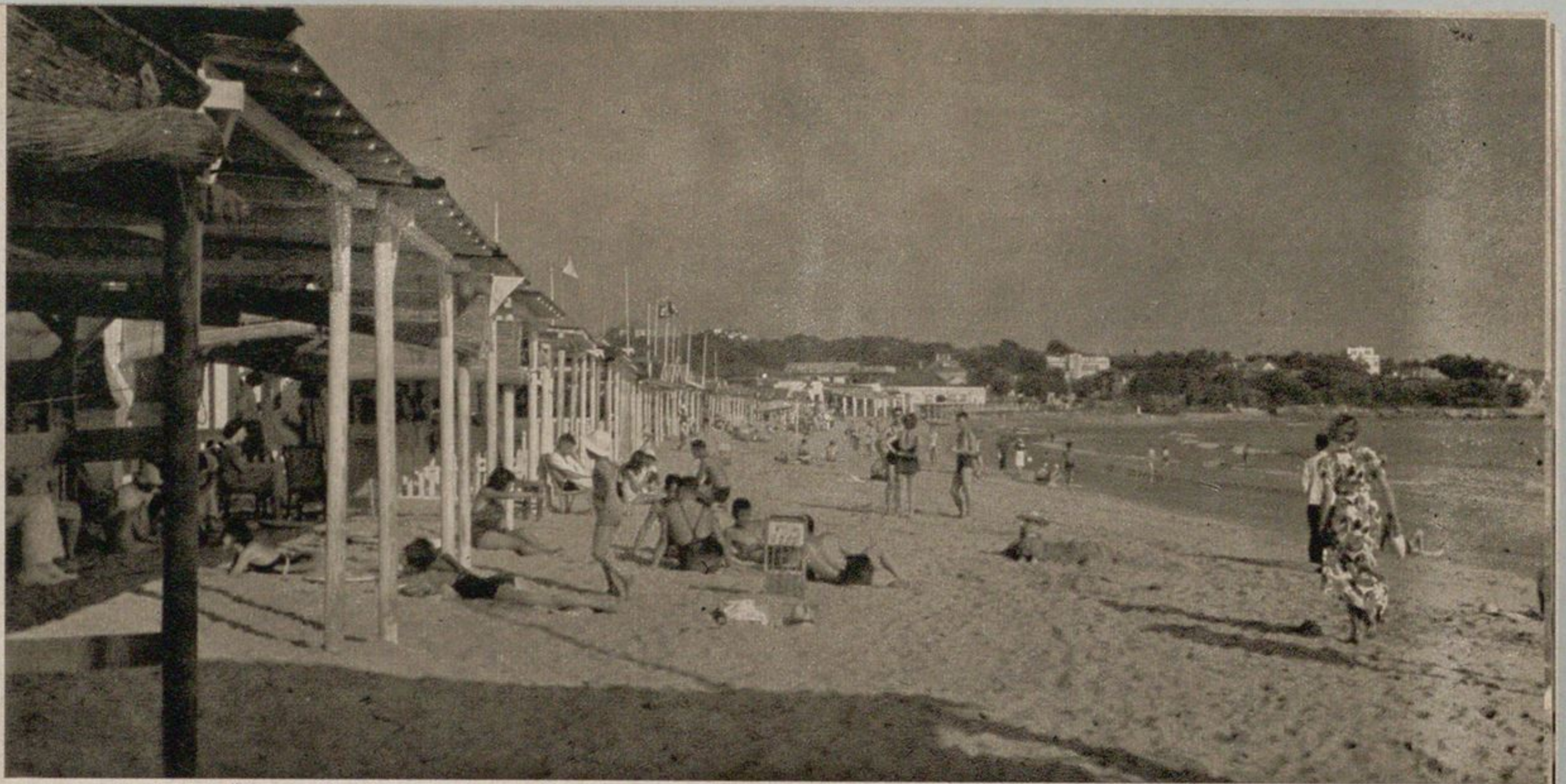
住宅地

Tsingtao in Summer

青島 1

第一次世界大戰の結果、獨逸の東洋發展の基地だつた青島も日本の勢力圏內に入ることになつた。爾來ワシントン會議による青島還附まで、日本は銳意之が經營に意を用ひたので、日獨文化の粹をあつめた大都會となつた

今事變に際して邦人工場、就中紡績工場の受けた被害は甚大であつたが、逸早く之が復興に努力し、今では事變前を凌ぐ殷賑を取戻した。卽ち事變前の人口二十五萬四千（內邦人一萬六千）に對して、本年四月現在の大青島は百八十八萬餘（內邦人三萬六千百一）といふ驚異的發展を示した

市街は有名な嶗山山脈が海に接してできた花崗岩質の起伏の多い小半島上に發達し、三面に海を環らし、木々の綠は濃い。船できた旅人の總てが港に入ると、山丘、斜面、平地に赤瓦の屋根が、或は高く或は低く綠の樹海の中を點綴する美觀に驚歎の聲をあげる

この半島と西南方對岸より突出する太平岬とが抱へこむ灣が膠州灣である。灣內には二十有餘の島が點在し、風景絕佳である

小港風景

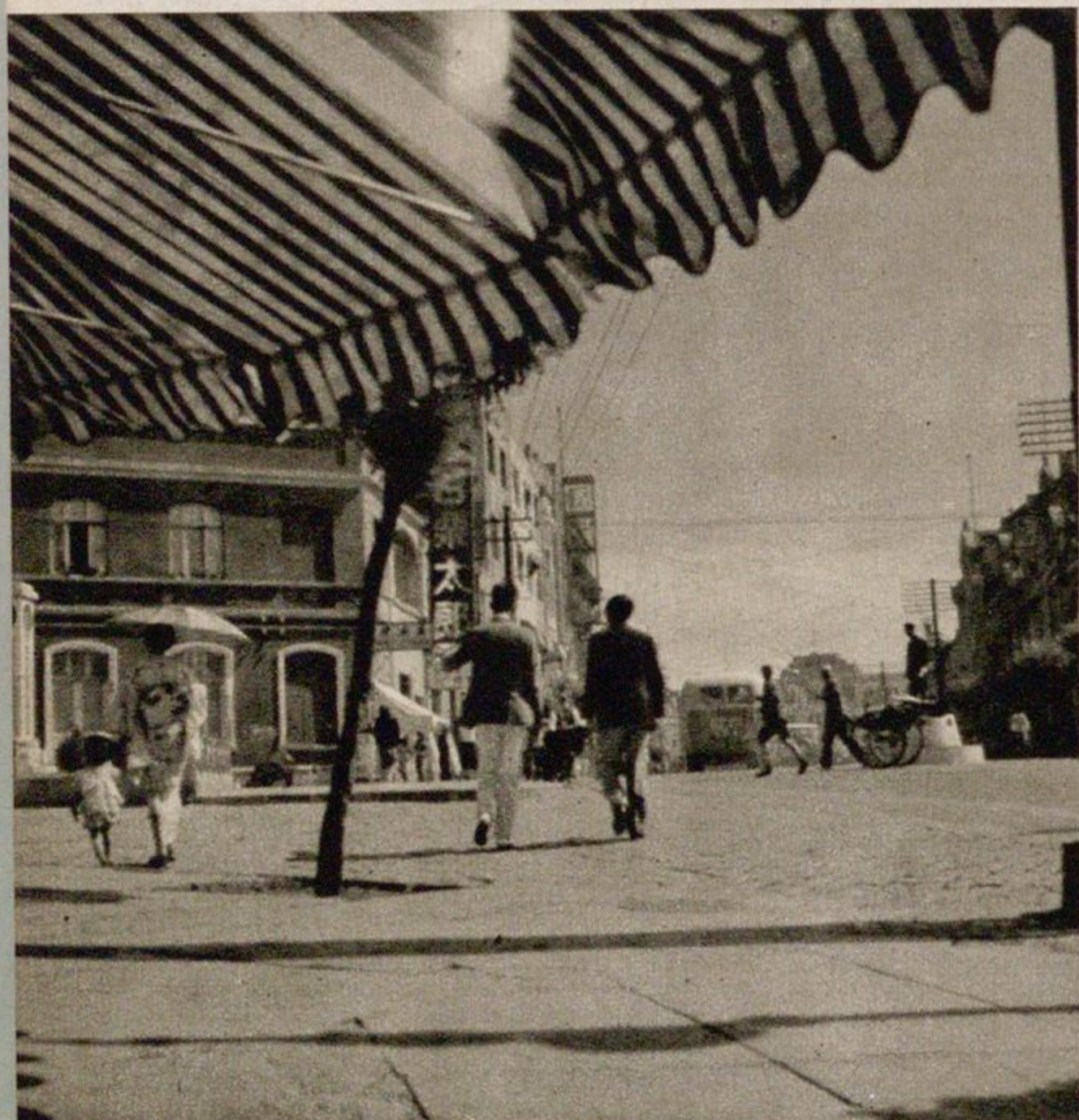
海水浴場、夏は内外人が集り、人種の展覧會場の觀を呈する

山東路で日本婦人のお買物

カトリックの尼僧

華北交通經營の東海ホテル

山東路所見

蠅拂ひ賣り

Tsingtao in Summer

青島 2

青島市域は事變前千三百餘平方粁の小區域であつたが、昭和十四年六月新たに接續地區が編入された結果、八千五百七十九平方粁、世界第一の廣大な面積を有する都市となり、わが大陸政策の足場として、遺憾なき外貌を整へるやうになつた

港は大港、小港に分れ、小港はジャンク貿易を主としてゐる。青島貿易は昭和九年以後天津、上海に次いで全支第三位を占めてゐたが、昭和十二年事變勃發により、其の影響を受け、第五位に低下してゐる。しかし東亞共榮圏内の秩序が確立するやうになると、自然の良港たる青島港貿易の將來性は天津を凌ぐに至るものと考へられる

尙ほ此の地は、日支和平條約に際し、阿部特命全權大使、新國民政府汪主席の會談があつた所として、まだ我々の記憶に新らしい

南宋時代婦人の装飾

Chinese Costumes during the Southern Sung and Yuan Dynasties

桃色と紫の上品な組合せである。襟に刺繍など施したところ、日本の半襟を思はせる（南宋）

寫眞に黒つぽく出て居る上衣は紫色、白いのは桃色である。襟には刺繍を施してある

南宋・元代の女性の服裝

南宋時代

頸飾　を瓔珞と云ひ、寶石と金とで作られたものである。これは佛像にも盛んに用ひられてゐるから、旣に漢以前から使はれたものであらう

南史の林邑國傳に「國王は法服を着、瓔珞を掛けてゐるが、恰も佛像の裝飾の如し」とあるから、頸飾は婦人だけのものではなく、當時は外國の貴公子も掛けてゐたのであらう

金冠　は三つの鳳凰から出來てゐる。山本悌二郎氏所藏の河南偃縣から發掘された金冠はこの型のものである。宋史の輿服志中の皇太子と群臣の頭冠裝飾の説明をしてゐる文章中に、「金銀鈒を塗りたる花飾、金銀を塗りたる花額云々」とあるのはこの金冠について言つたものである

耳環　は逸雅に據れば「耳に掛ける珠を璫と言ふ。これは元來南蠻人の習俗で、女子の性は淫に惰し易きによつて耳に璫を掛けてこれを止む」とある。しかし莊子は「天子の侍御は耳を穿たず爪を剪らず」と言つてゐるから、ずつと昔からあつたものであらう

裙（スカートの類）　は細いものが流行してゐたことは唐末と同樣である

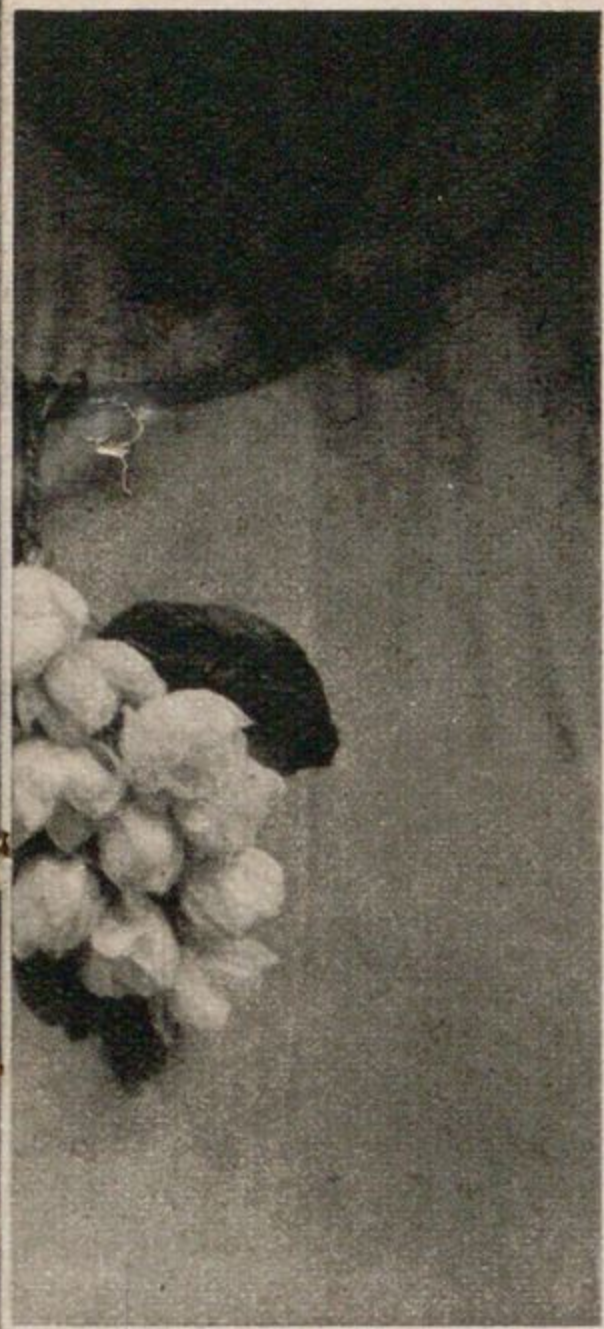
元時代

元朝は蒙古民族が支那を統治してゐた時期である。民間の服裝は凡て南宋と同樣である

罟罟　は冠の一種で、階級の差別なく皆冠つたものである。喬碧窓の歌に

　梳いた垂れ髮　柳のやうに
　搖れる馬上に　夢心地
　あら珍らしと　江南人が
　固姑見たさに　窓による

「固姑」「罟罟」「姑姑」「顧姑」は凡て蒙古語の譯名で同じ物である。そして后妃も貴婦人も、舞妓も姑女も冠つてゐたものである。ただ北方に流行してゐて、江南ではあまり見なかつたものらしい

元代の服裝は南宋と同じである冠は當時北方支那で流行を極めた罟罟（罟は網の意）と稱するもの衣裳の色は南宋のものと同じ

支那服と成衣局

仕立屋（成衣局）の諸道具

成衣局の仕事場、後方にぶら下つてゐるのは糸である
巻いた糸は高價だからここではあまり使はない

Chinese Dressmaker and their Accessories

支那の婦人服はこの事變を一段階として様式の大飛躍をなしつゝある様に思へる。はじめ襟は高く裾はひきずる程長かつたものが反對に襟は低くなるし裾は思ひ切り短くなつて脚線美も露はに、そしてハイヒールやサンダル靴を履く様になつた。襟、袖口、裾廻しにも派出な色彩のリボンが走る。前で止めた襟の開きも横にすべつて肩先になつたり、去年あたり迄は縦の瀧縞が流行してゐたかと思ふと此の頃は又、大柄な横縞になつて來た

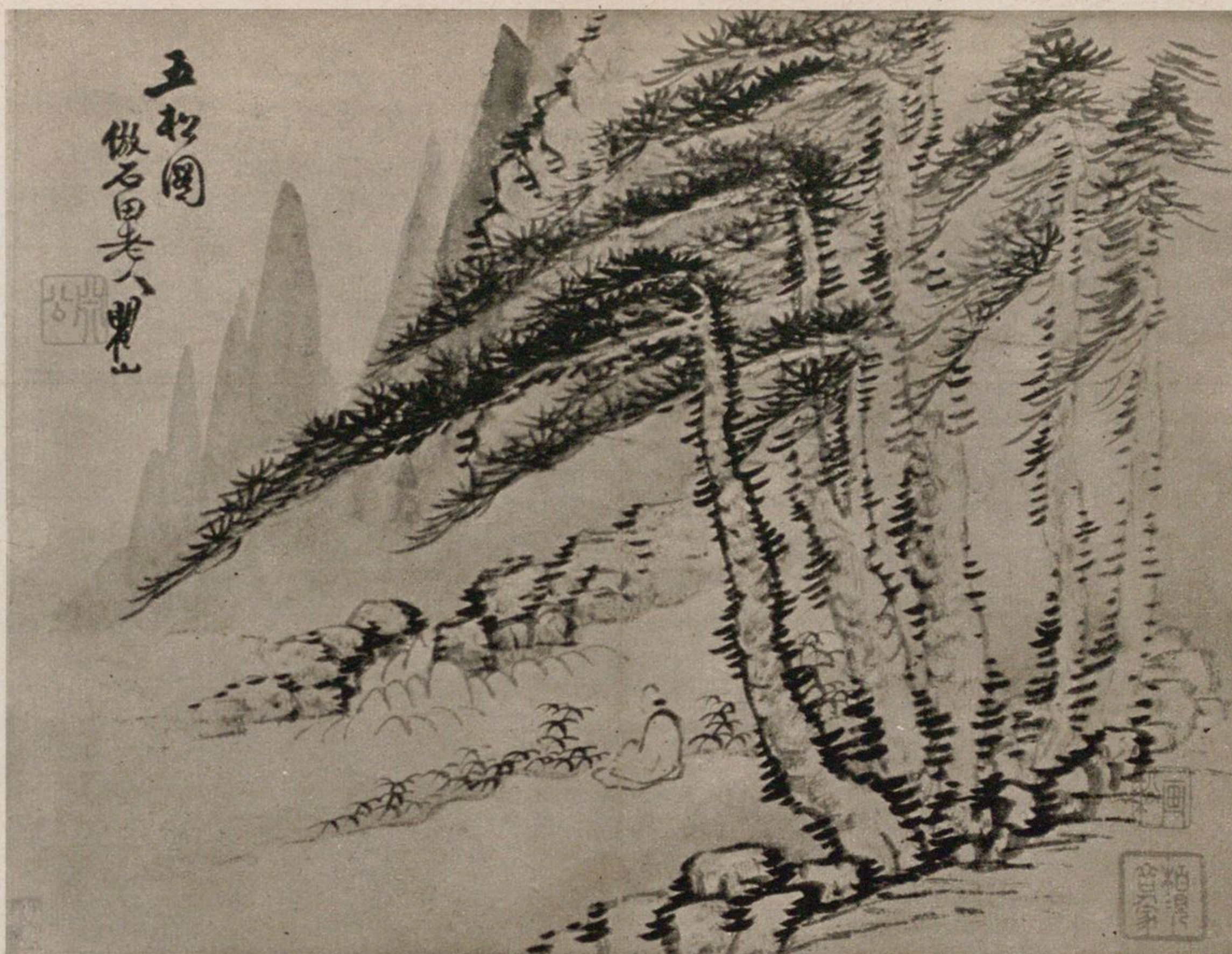
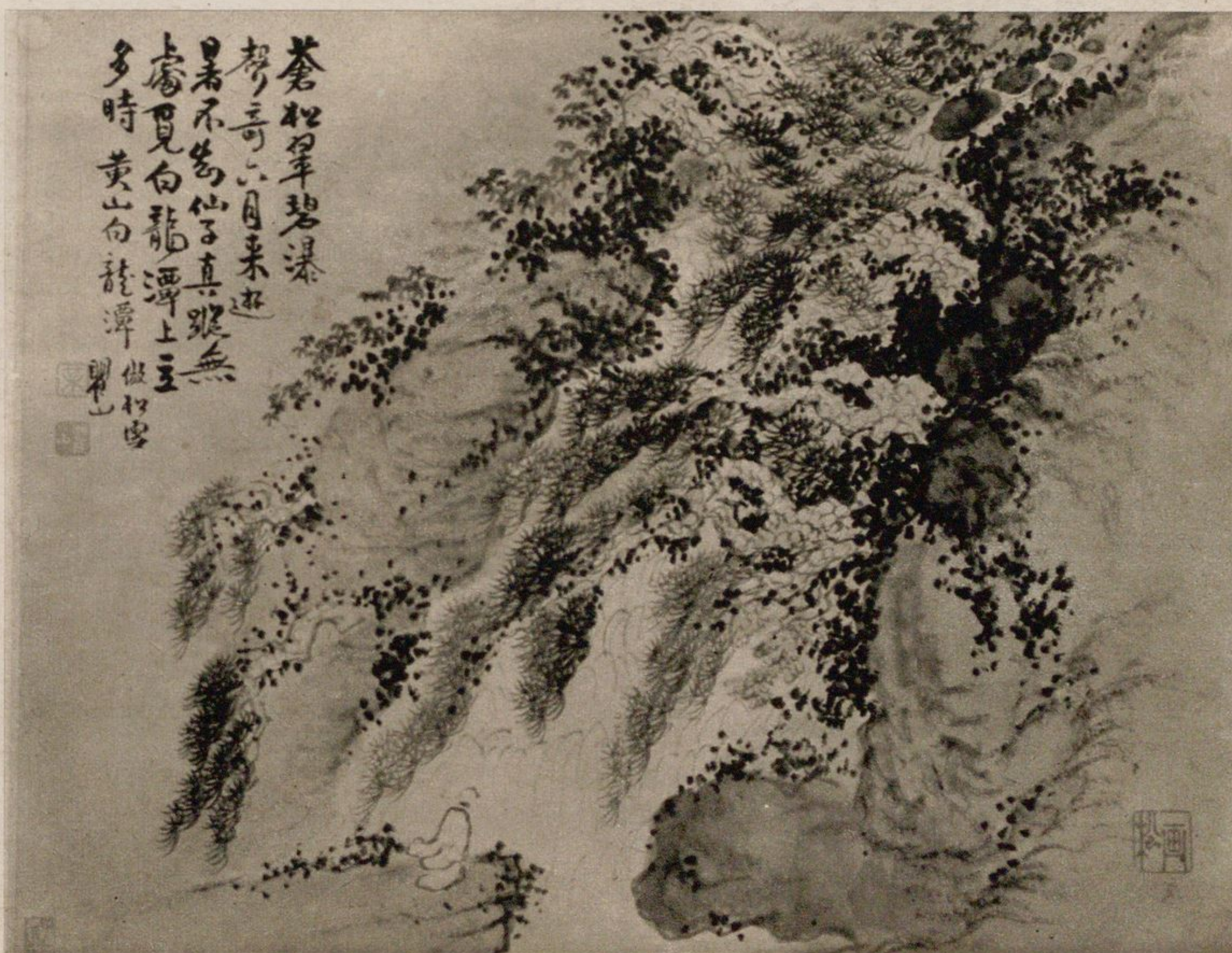
何時の世、何時の時代でもさうであるやうに、婦人の服装の流行と云ふものは、生れてはすたれ、生れてはすたれ眼まぐるしいことである

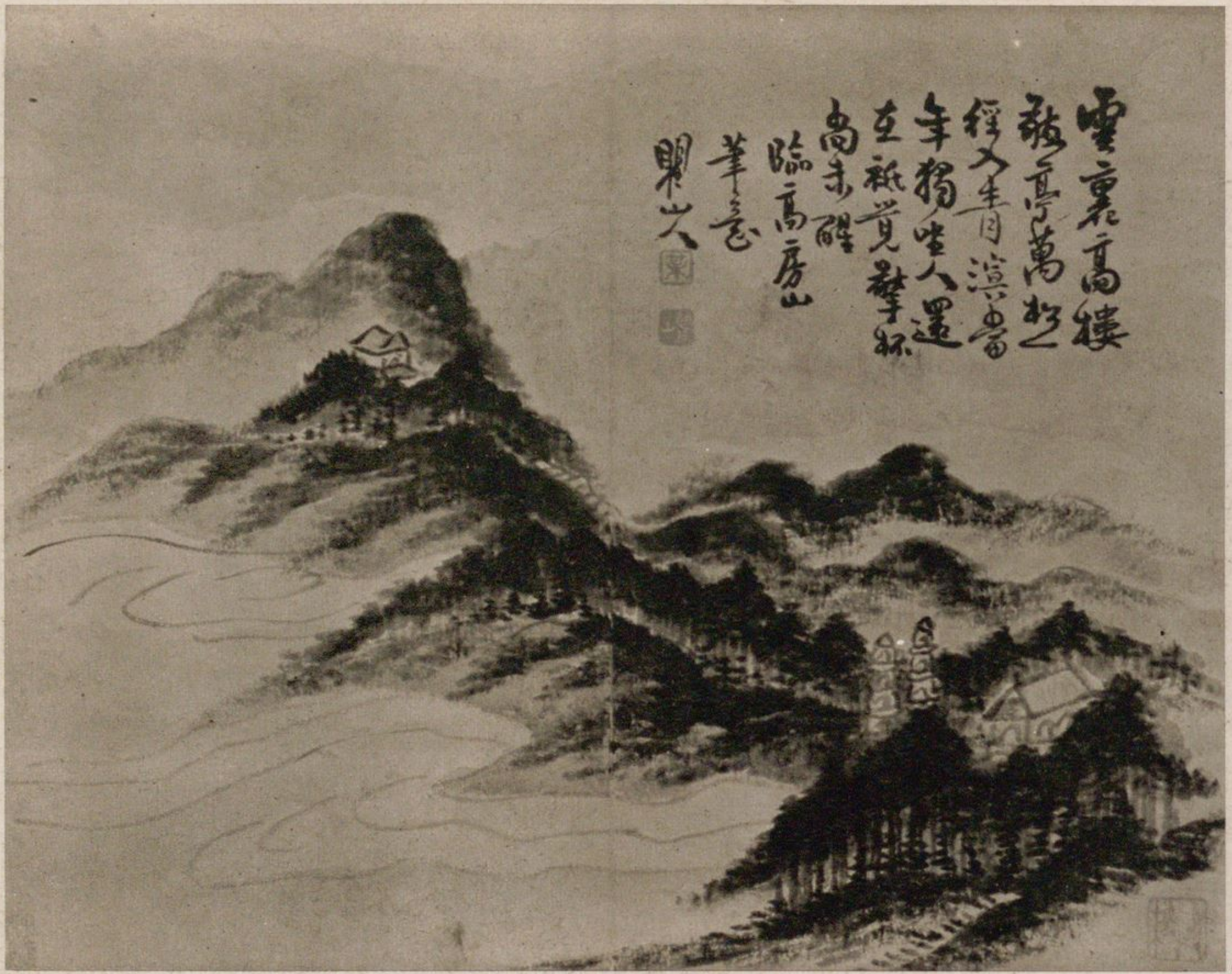
襟とホックの一考案

北京の婦人達

綢緞舗（呉服屋）風景、柄、色、型、それぞれやかましく、何處の國でも變りはない、綢緞舗でも近頃は日本人向のワンピースを作るやうになつた

山水圖

梅瞿山筆（清代）

dscapes by
Artist Mei

梅瞿山の畫帖の一部である。瞿山は名清、字淵公、或は遠公。安徽省黄山に近い宣城の人、順治十一年の擧人であ

奇氣がある。「嘗て黄山の圖を寫す、煙雲變幻の趣を極む、黒松蒼雄險勁である」と阮亭が言つてゐるやうに、〃

Chinese Lan
the Master
Ch'u Shan

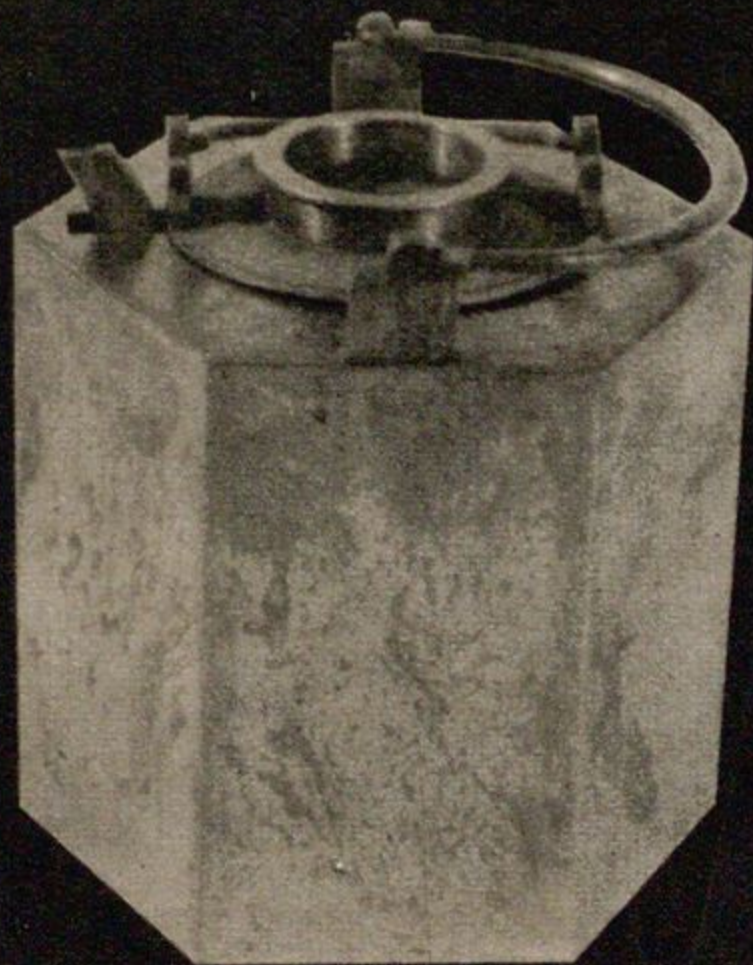
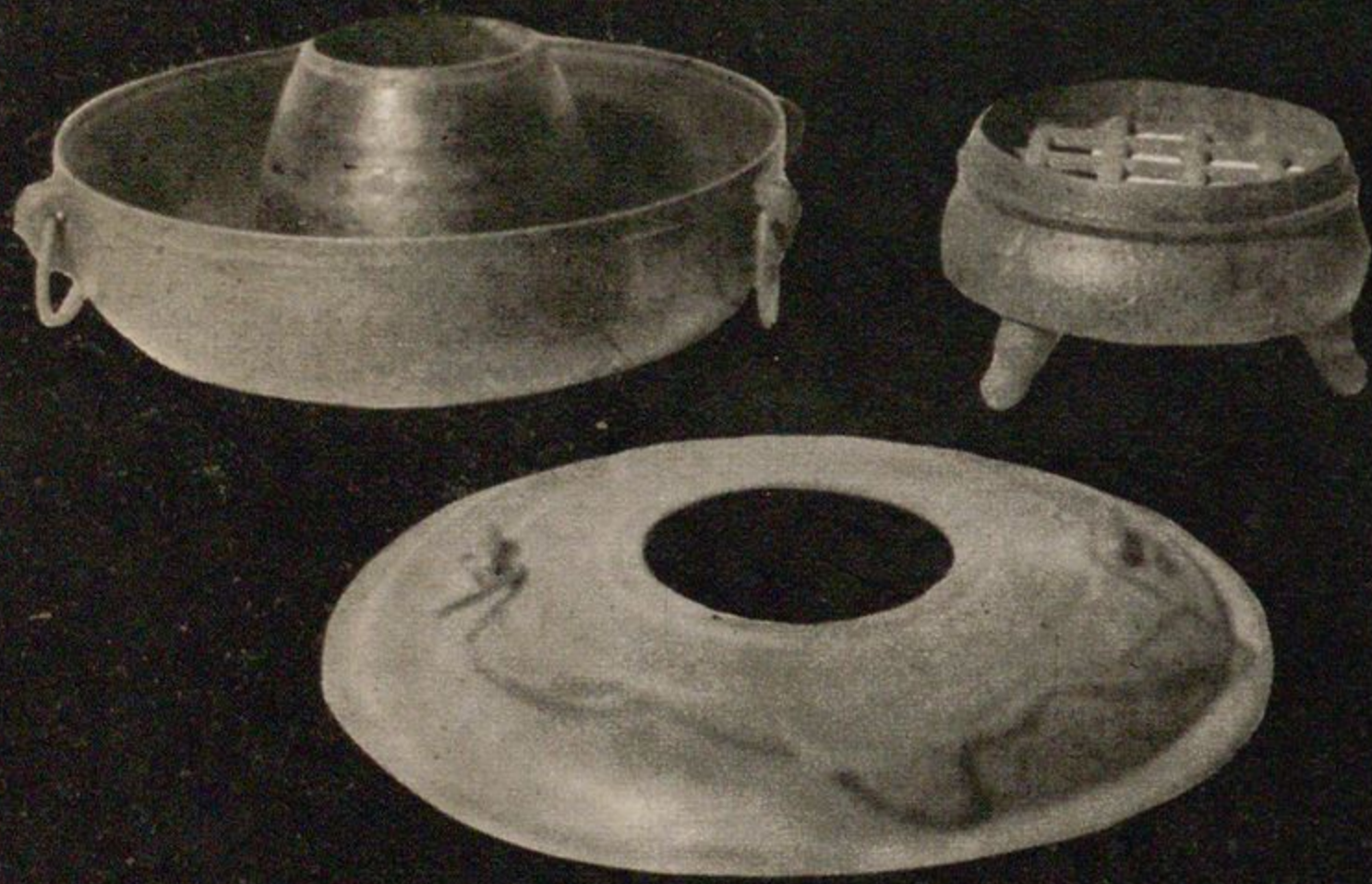
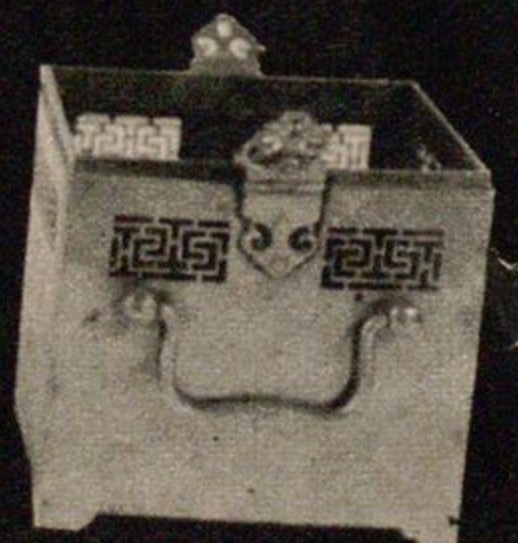
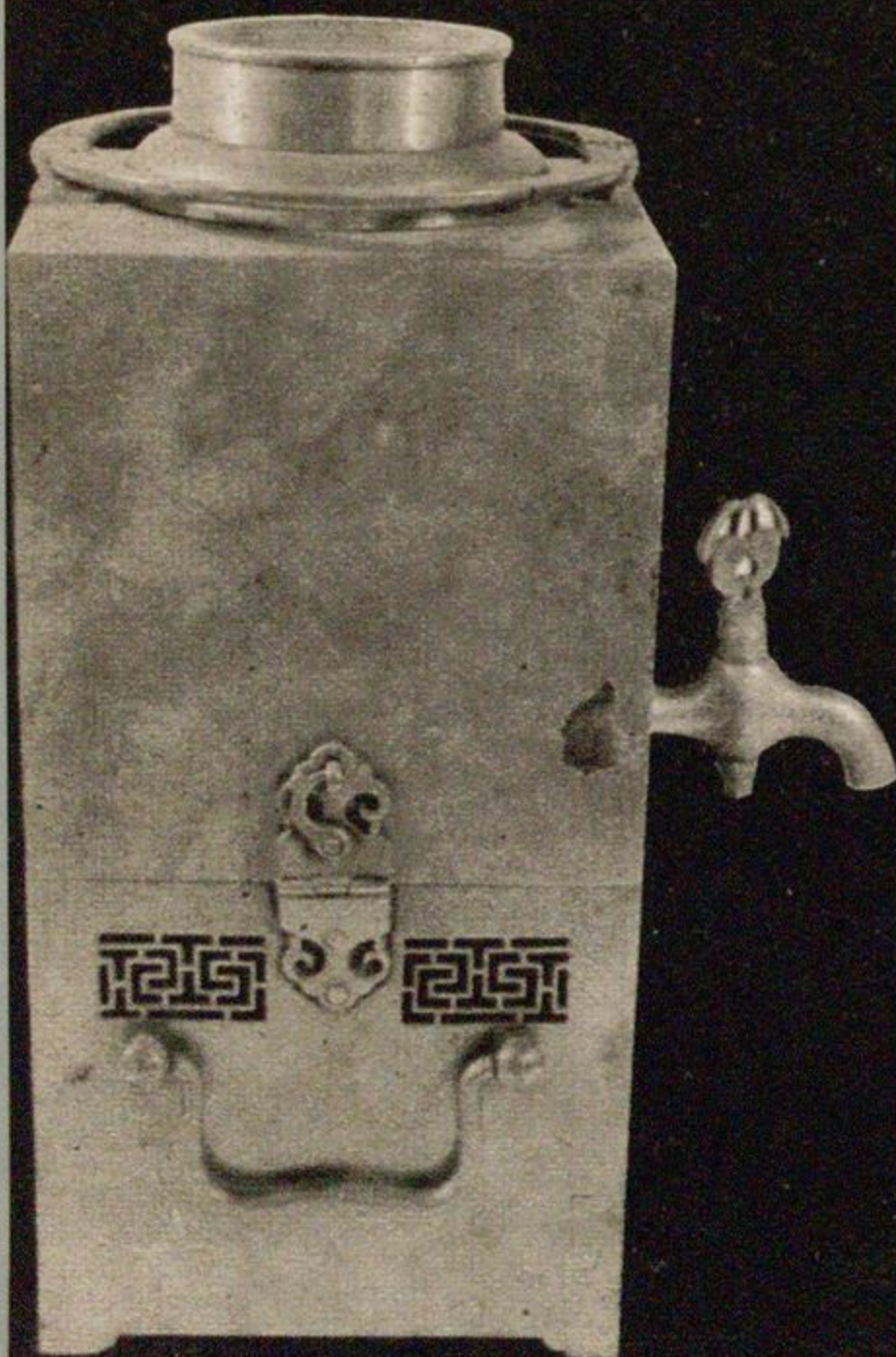
る。幼にして讀書を好み、夜も寢ず、長じて、英偉豁達、博雅を以て稱された。詩にたくみで、殊に書にすぐれ、畫は

の山水は妙品に入り、松は神品に入ると言つてよい

――北京電車公司、張先生藏――

奶茶壺、湯沸器である。右方の臺はアルコールランプになつてゐて、其上に左方の壺狀のものを乘せて沸すのである、高さ約一尺

由來北支は銅鐵工藝の本場である。銅の原料に赤銅あり、黃銅あり、白銅あり、また鐵に錬鐵あり、鋼鐵あり、それぞれ用途と製品を異にする。且つ銅は打物とすること多く、鐵は鑄物が多い。黃銅、赤銅器も亦技の精巧なもの

煖水酒壺、おかんをつけるもの、左方の藥罐に入れた熱湯の中に右方の酒を盛つた藥罐をつけて煖める、高さ約六寸

火鍋子、まん中の煙突狀の所に炭火を入れてよせ鍋式料理をする、大小種々あり

は宜興その他中支のものが多い。粗なる赤銅器は大同が本場である。しかし最近は、原料および生産關係大いに變化し、例へば、大同必ずしも本場でなくならうとしてゐる。鐵の土産品は山西澤州が有名である

銅茶壺、左の筒に茶の葉を入れ、中の藥罐に水を入れ、右の函にはアルコールランプが入つて居る、高さ約一尺

無敵！國産第一位

ムッソリーニペン

スラスラ書けて
錆びず値の廉い
國産逸品！

新生國策イリヂュウム
白金ペン付

クラウン万年筆

書きよく
體裁優美
構造堅牢

流線型

北京北海公園

大阪・東京・小倉
株式會社
澤井商店

測石站舍炎上（一）

——石太線匪襲事件の回想——

渡邊庄治

華北建設途上に於て、忘れることの出來ない石太線事件は、今尙生々しく我々の記憶に甦つて來るものであるが、この一篇は當時その最も災禍の甚だしかつた測石站にあつて、文字通り職場を死守し、九死に一生を得た華北交通會社社員、渡邊庄治君の手記である。

八路軍多多有

測石站站務員の私は、その日丁度當務で、中國人の副站長と、ほか五名の站員を督勵して、夜に入ると共に警戒を怠らなかつた。

この附近は、ずうつと情勢が惡かつたし、それまでも站近くの部落で相當の戰鬪が行はれたことが再三あつた。で、又かぐらゐの氣持ちで、中國人に「今晩お客さんが來るから茶水を澤山沸かしておけよ」などと冗談を飛ばしてゐたものだ。ただ日暮前、隣部落に便衣隊が入つたとの情報に出動した警備隊が、捕虜二名を連れて來たし、其奴が鐵道破壞具を持つてゐたので各關係に連絡を濟ませ、爆破の音でもせんかと耳を澄ませてゐた。

八月だから夜でも蒸し暑い。

「今晩は危なさうだな」

と云ひながら非番なのに站長が出て來た。それから給水司工の武井さん、線路工長の田中さんと集つてきて、敵の話を涼み話に氣焰をあげた。

二十四時も過ぎ二十一日となつた一時二十分頃、それまでの靜寂を破りヒユーンと銃彈が飛んできた。愈〻來たなと張りきるところへ、站舍後の山上トーチカから下りて來た高野班長が「敵は南の山に二三百ゐるらしいが大したことはないよ。站員は站舍の前を警戒してゐてくれ。警務員は中國人を指揮して今まで通り構內出入口の東西を嚴重にやつてくれ」と言つた。

私は下と上との連絡係で、上つたり下つたり、元來山登りの不得手な自分は、フウフウの汗ダクダクと云ふ態たらく。だんだん敵の小銃彈が烈しくなりだした。右方、左方で物凄い音、橋梁爆破らしい。途端に〇〇電話、各站電話がばつたりと聞えなくなつた。

左隣の芹泉站との電話も駄目、先刻までの連絡では芹泉站は小銃の音もしないと云つてゐた。ただ一つ右隣坡頭站との電話だけは、不思議になんともない。聞いてみると

「俺の方も彈が熾んに飛んでくる。敵は相當有力らしい、いつもとは、どうも違ふやうだぞ」

元氣な聲だ。山の上ではこちらも時時小銃を打ち出した。その落ちついた態度がたのもしい。

夜明が近づいてだんだん敵彈は衰へて來た。朝になつて東の山を見ると、ゐるゐる、稜線に黑く連つて動いてゐる。どうも壕を掘つてゐるらしい。

いつもの敵さんと違ひ、なかなか落

内容

ちつきつぷりがいい。爆破の音といひ大部隊らしいが「ふふん」とみな感心しながら、「なあに負けるもんか」とお互が勵し笑ひ合つた。

九時になると不安さうな顔をしながら、中國人站員がやつて來た。口々に

「今回八路軍多多有」

と云ひ、變に見透しをつけたやうなことを云ひ出したりした。

腹が立つて來て、

「不用害怕、〇〇から應援軍が多々的來、それまで我々が八路軍なんか一歩も入らせないぞ」

と云つても、納得ゆかないといふ怪訝な顔をしてゐる。

交替するもの達はいづれもそそくさと歸つて行つた。彼等は仕事も何も手につかない。一とかたまりになつて、絶えず喋つてゐる。喋つてでもゐなければ不安でならないのだらう。

取敢へず萬一の場合にと、枕木をよせ集めてバリケードを造らせたり、舍内の物品整理をやらせたりした。

彼等の家は站舍と川一つ距てた向うの部落にある。そこにはまだ敵が來てゐないらしい。站舍のすぐ背後の山は警備隊が護つてゐる陣地で、下から大きな聲で呼んだら聞えるぐらゐの高さでしかない。これを圍んでもつと小高い山が三方にある。その中央の山に今敵が來てゐるのだつた。

十四時頃、坂頭から電話で「敵の輜重隊らしい人馬が澗石方面に向つた」と知らして來た。

私達は手ぐすねひいて待つてゐると川向うに現れ出した。おつとり銃で分捕りせんものと駈けつけたが、それ等は石炭運搬の苦力達にすぎなかつた。

明るい中は大したこともなく、たゞ坂頭から刻々に惡化しゆく情勢をしらせる電話がしきり。

白酒で訣別會

日が暮れた。無氣味な夜が再びやつて來た。坂頭の藤原君を呼び出すと

「敵は早や構内に入つた氣配である完全に包圍された。もう我々は死を覺悟した。全力をあげて潔く鬪ふよ」

「さうだ、我々は職場をまもりそこに死ねたら本懷だよ、それは軍人精神といささかも違はんからね、すでに一つのものだ。頑張つてくれ給へ」

と答へてゐる最中、受話器に轟然と砲彈の音がひびいて來た。瞬間、電話が切れてゐる。

「おお！　おお！　藤原君、藤原君、坂頭――」

と連呼しながらボタンをいくら叩いても應答はない。やられたな、とびくんと感じた。藤原君の聲もそれが聞きじまひであつた。

坂頭站は站長以下六人、兵隊さん二人がこの時にやられた。助かつたのはただ二人つきりである。今でも藤原君を思ふと、沈痛なその聲がひりひりと耳朶にひびいて來るやうだ。興奮もしてゐない靜かな清い聲だつた。

もう何處とも連絡は出來ない。一羽ゐた傳書鳩も站長が

「坂頭站危なし、彈丸補給を乞ふ」

と書いて飛ばしてしまつた。

間もなくして坂頭はやられた。何んにもならなかつた。お互が暗然と涙を呑むばかりだつた。

夜に入つて、急に雨が降り出した。土砂降りである。私と兵隊さんと警務手と三人は、東方構内出入口に歩哨に立つ事になつた。哨舍がトタン屋根なので、雨の音が際立つて彈音なんかきこえさうもない。私は歩哨など初めてなので、どうも胴震ひがして仕方がない、寒いばかりでもない、たしかに震へてゐる。これが武者振ひだと辯解して、くそくそ、何をこん畜生と腹に力を入れ、ダーンと一發ぶつ放した。

兵隊さんが「どこだどこだ、敵は」と云つた。敵なんか見えはしないが、自分はありありと落ちついて行つた。

その夜もどうにか明けた。みんなで最後かも知れんから、御馳走を拵へて別盃を交さうと言ひあひ、うどんを作るもの、てんぷらをと興がつて懸命に腕を振ひはじめた。そして兵隊さんを呼んで、白酒で送別會が催されたのだつた。しかし誰もある一點だけを醉はさない。

晝近く雨も霽れ日がヂリヂリと照り出した。昨日から一睡もしてゐないので、交代に睡眠をとりに部屋にかへつた。十三時頃から坂頭方面に熾んな砲音が聞え出し、それがだんだん近づいてくる。

「友軍だ、陽泉から援軍が來たのだ」

「あれは〇砲だ、いや〇砲かな」

「敵にそんな砲がある筈はない、正しく我々を救ふべく友軍が來つつある」

みんな抑へきれない喜びをうかべて勇躍した。

「友軍だつたら、迎へなければなるまい、寢てゐる者も起きて來い」

日章旗と社旗を掲げて迎へようといふので東方哨舍までみんな集つて今か

今かと待つた。ラッパの音が近づいてくる。確かに日本のラッパの様だ。間もなくカーブ地點から日章旗が見え出したではないか。線路傳ひに來る。みんな默つて旗を振り手を振り出した。急激な感動で言葉も出來ないのだ。
「變だぞ、黒服を着てるぢやないか」
「うん、變だな」
「いや陽泉の警察隊も應援に繰り出したんだらう」
さう言へばカーキ服だつてちらほら見える。
「間違ひない。バリケードをとつてやつてくれ」
と言ふので、私は線路上のそれを取除けに行つた。尖兵がもう五、六間先に見えてゐる。
その顔を見た瞬間敵だなと感じた。そしたら後でも、
「敵だ、八路兵だツ、危ない、早く歸れ！」
「まんまと謀られたか。畜生ツ、撃てツ！」
怒號が亂れ飛んだ。私が銃を構へると、敵は味方だから射つなと言ふつもりだらう、手を振り近づいて來る。
何くそつ！　と私達は一齊に射ち出した。それからの亂射、亂撃、敵はわれを小勢と見て急速に肉薄してくる。
手榴彈が炸裂する。横で、「やられたツ」とつぶやく聲、篠原警務員だ。彈丸が手首を貫通したらしい。ここで頑張つては不利と、射ちながら兵舍前まで退き、應戰してゐると、班長から傳令が來て、「全員、山にあがれ」との命令だ。もうその時分、敵は站舍、兵舍、山上トーチカを包圍圈に入れてしまつた。敵山砲が鳴り出した。山上の我がトーチカをねらつてゐるらしい。
站長はせつせと重要書類の處置をしてゐる。私は自分の部屋に入つて、萬葉集の袖珍本をポケットに突つ込み、站長を手傳つて、書類を持ちながら山に登らうとした。
中國人は既にみな居ない、警務手さへがこの午前、三人共脱走してしまつた。我が方は兵隊さんとも〇〇人の小勢だが、日本人だ、負けるもんか、と繰り返し合つた。
それでもまだ、警備隊のボーイ二人と、站舍のボーイだけは殘つて、彈丸運びを手傳つてゐる。いづれも可愛い十五、六の少年達だ。站長はボーイに
「お前達は逃げなさい。今まで頑張つてくれて有難う、親も部落で心配してゐるだらう、私達は大丈夫だから歸りなさい」と云つた。
少年は云ひやうもなく悲しさうに顔を緊張させて、
「站長さん、私が案内する。安全な所があるから逃げませう」
との意味を云ひ張つた。站長はそれを叱り飛ばし、金を握らせて無理に追ひ歸した。

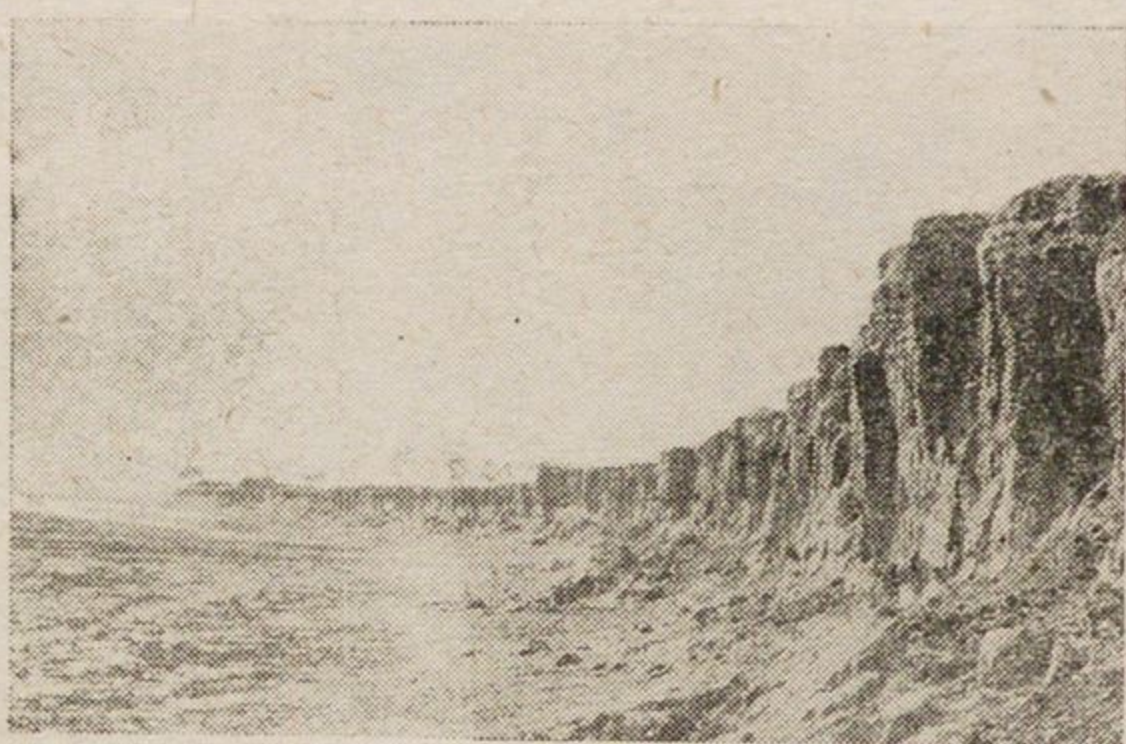
最後の肉迫戰

山上で突然「わーつ、わーつ」と喚聲がする。肉彈戰だ。それつと私達は駈けのぼつた。
班長は「いま突撃して來たから、斬り合ひをしたよ。敵もなかなか勇敢で手强かつた」と返り血をあびて笑つてゐるのである。その普通の態度にむしろあきれ乍ら見廻すと、十人ちかい敵屍體がごろごろ散らばつてゐるのだ。
「會社の人には氣の毒だが、一緒に全力を盡して最後まで行動を共にして下さい」
「勿論やりますとも、社員だつて同じです。そんな區別はしないで下さい」
「敵の兵力は約二千で、山砲、迫撃、機關銃あり、珍らしく裝備のいい敵さんだ」といふ。
その間も彈丸は四方八方から飛んでくるのだ。まさに十字砲火とはこのことだらう。
私は班長に示された壕の北側に入つた。こちらは輕機〇挺と各自の小銃〇〇だけだが、意氣いよいよ軒昂たるばかりだつた。壓倒的な敵に、しかも我が方は守勢である。陣地は低い。すべて不利であるが、全く相手としては不足ない敵さんだ。
砲撃はこの日が一番烈しかつた。敵は一氣に攻め落すつもりだつたらうが小勢なれども日本兵だ。もう攻めあぐねてゐるのだ。
白晝の突撃は一ぺんで恐れをなしたか、それつきり一度もなかつた。私は山上に上つてから却つて落ちついた。站舍、兵舍に群がつてゐる敵を盛んに射つてやつたが、何しろ敵彈は前後左右から飛んでくる。うつかり一方にばかり氣をとられたら危ない。射つてはかがみ、のびては射ちである。
ヒューン、ビューン、ドドン、シューツ、シュシュシュと、まるで彈音のシンフォニー、それもだんだん耳につかなくなつて行く。誰か
「やられたツ」と倒れた。
二間先横にゐる金差一等兵だ。ううと低い呻き聲が切れたと思ふと

「てんのうへいかばんざい」
とはつきりした聲が響いたのだ。私は愕然とした。そして涙がとめどなく流れた。
「よし！　よくやつたぞ」
私は無心にかう叫んでゐた。私の生涯にこのやうな感激が、おそらく再びあるとは思はれない。萬卷の書を讀んでも、萬人のよき言葉を聞くとも、短い、しかし日本精神を如實にあらはしたこの至高、至純の聲よ。私は呆然とし、やがて目が醒めたやうに、全身に勇氣がリンリンと漲り、敵は斷じて倒さねばと憤怒がごうごうと胸中に渦卷くのを覺えた。また誰かやられた。
武井さんだ。うんうんと、苦しさうである。
「どこをやられたんだ」
と叫んだが答へない。何しろ壕が淺くなつてしまつたので早速傍にも行けない。彈丸が集中して飛んでくる。暫くして
「煙草をくれ、タバコが喫みたい」
と云ふ聲である。私はひどく心を動かされたが、誰もタバコを持つてゐなかつたのだ。
それからやや銃聲が少くなつて行つた。私の右横に藤原警務員がゐる。
突如、思ひがけない東側から手榴彈がくるくる旋回しながら二人の間に落ちてきた。私も突差に自分の手榴彈を打ち投げた。それがうまく命中した。敵が寄越したのも、あつと云ふ間であつた。ガーンと炸裂した。
「やられたツ」と藤原さん、
「渡邊君、駄目ぢやないか」
とつづけて叫んだ。私にはその意味がわからない。幸ひ二人共奇蹟的になんともなかつた。
「俺は君が手榴彈を失敗したかと思つたんだよ」
と藤原警務員は苦笑した。成程、彼から手榴彈の投げ方を習つてから間もなかつたのだ。
「おい見損ふなよ」
と私は自慢してやつた。夜に入ると敵も、こちらの頑强さには驚いたらしく、休養をとつてゐるのか、彈丸の音はやんだ。
私は仰向けになつて天の星をながめた。綺麗な星、こんな綺麗な星を子供の時に見たやうな氣がする。永い間見なかつたもののやうな氣がする。蟲の音も聞える。
ふつと何だか夢のやうな氣がした。しかし先刻から眠りたくても眠れないのだ。寒くてまるで全身がぎいぎいと破片でもまれてゐるやう。八月だといふのに、晝はあんなに暑かつたのに、夜は滅法寒い。それでも二晩少しも眠つてゐないので、いつの間にか睡つてしまつてゐた。
いく時間寢たらう。ふつと眼を覺すと、ぶるぶる寒さが身に沁みる。何だか異樣な音がすると思つて壕から乘り出すと站舍が炎を噴いてゐるのだ。
バリバリと木具の燃えはじける音、がらがらと崩れる煉瓦の音、だんだん炎が高くなつて壕に坐つて中空が明るく見える。その中に不調和な音がかすかに聞える。奇怪だ。ハーモニカの音のやうだ。敵兵がもつてゐたものか、それとも兵舍にある誰かのハーモニカを吹奏してゐるのか、それは中國の曲だからどんなものか知らない。
站舍を燒きながら、音樂的熱情を感じるなんて、全く癪に障つてしやうがなかつた。
あたりを見廻すと、みんな旣にだまりこくつて眺めてゐるばかりだ。站長はと行つて見ると、齒を食ひ縛つて無念の形相、「俺は濟まない」と云つたきり。その心情を察して
「仕方ありません。全力を盡したが及ばなかつたのです。站舍を自分等の手で燒くひまもなかつたのです。站長は重要書類の處置は濟んでゐるし、出來るだけの事はやつたのです。心を鎭めて下さい」
「有難う、しかし何とも殘念なのだ」
（ああ、站舍が音凄じく燃えてゆく。眞如の闇にあかあかとして）
それからまんじりともせず、夜が明けていつた。朝になつたら急に空腹を覺え出した。みんな同じだらう。苦痛にゆがんだ顔をしてゐる。
敵はと見ると目下に見えない。はてな、何か計略があるなと思つたが、それとも部落に集合して休養か掠奪でもしてるのかも知れない。右往左往の人影が遠くに見える。站舍はすつかり燃え落ちて石壁だけが殘つてゐる。兵舍はまだそのままだ。
「しかし、腹が減つた。これでは力も出ない」
「一か八か、奪取に行かう」
「奪取ぢやない、自分達の物を引取りに行くんだ、遠慮するな」
それで、兵隊さん二人と私が出掛けることになつた。（未完）

黄河と小越平陸

石川順

支那では、昔から治水事業が重要視せられて、政治上においても最も重大に取扱はれてゐたものである。特に北支には黄河が流れてゐる。これが凡そ問題の川で、禹の治水によつて、河道が奠められてから四千有餘年の間に河道が變遷すること六度、その度毎に數百萬人の生靈が奪はれ、何千萬人かの流域に住むものが、水厄に苦しめられ泣かされたものである。黄河の水患史は、正にこの世の生地獄そのもので、その間に哀話、悲話、慘話がどれだけ秘められてゐるか分らない。河道の大變遷が六度といつても、今までに水のないところが、突然河になつたり、沼になつたりするのである。想像も出來ないやうな變化である。こんな歷史的變化は別としても、黄河の氾濫による水害の記錄を纏めるだけでも、大變なことである。新支那建設の基礎的大事業として、黄河の治水が取上げられ、わが國から多くの專門技術家が來て、支那側の當局と眞劍にその對策を講究しつつあることは、寔に意義あることである。

ところで、近頃なればこそ、猫も杓子も、口を開けば、黄河がどうの、治水がどうのと天晴れ先覺者振つた話をするが、つい四五年前、當時の滿鐵總裁松岡洋右が、北支一帶の水害が、豫想以上の犧牲と被害を與へ、數百萬の難民が、住むに家なく、飢餓に瀕してゐるの慘狀を知つて、『日本が進んで黄河治水の計を稽へ、その實現を圖つてやるべきで、それが日支關係調整の基となり、兩國が恆久的に結ばれる機緣となるものだ』といひ、黄河の治水問題を說くや、識者といはるるものまで、また松岡の馱法螺かといはんばかりに冷笑したものである。しかも、その頃『松岡はいつも夢のやうなことをいふ』というてゐた自稱識者の中に、今流行りもののやうになつてゐる黄河治水を、さも昔から說き廻つてゐたやうなことをいうてゐるものがあるから世の中といふものは面白いものである。この話は數年前の事である。時代の移り變りが、いかに急激であるかといふことは、單にこのことをもつても明らかである。況んや、今から廿年も前に、黄河治水の要を說き、自らその源流を窮めようとして、千辛萬苦、黄河の探險踏査を終生の事業として行うた小越平陸が、恰かも狂人の如くに扱はれてゐたのも、無理のないことかも知れない。

先覺の有志には、よくかういふことがあるが、假りにその生ある中に認められず、惠まれぬとしても、後の世に知られ、その名を追慕せらるるやうになれば、もつて冥すべしである。

小越平陸は新潟の人、北溟と號し、蝸牛庵主人といひ、慶應二年の生れ、昭和四年十二月、六十四歲をもつて東京に歿した。かれは、若くして海軍に入り、壯年にして志を大陸に立て、支那東部ならびに滿洲を縱橫に踏査し、その足跡を印しないところは、僅かに新疆、廣西二省のみといふ、蓋し稀に見る旅行家、探險家といふべきで、無慾恬淡、常に敝衣を纏ひ、旅から旅へ飄然として步き廻つてゐた奇行家である。少時、勝海舟を欽慕し、新潟を出て東京につくや、直ちに海舟の門を敲き、朴直をもつて愛せられ、支那行の志も、實は海舟の助言慫慂によるものであるといふ。

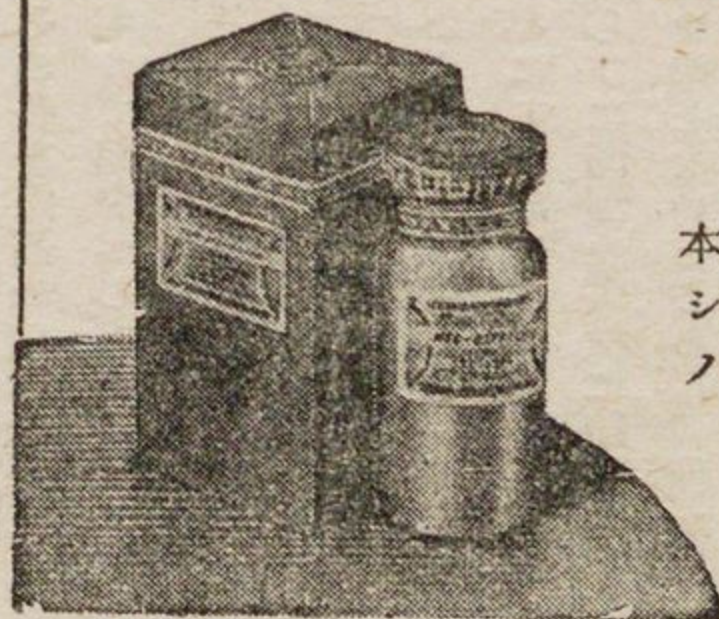
日清戰爭の後、ドイツは膠州灣を占領し、ロシアは旅順、大連を租借してしまつた。この年、卽ち明治卅一年二月、かれは、孫文の同志として支那革命に參畫し、南支に革命の華と散つた山田良政と共に、辮髮胡服、苦力同樣の姿のまま營口領事館に現はれた。時の領事は、今の駐支大使本多熊太郎、聞けば、旅順偵察に出かけたところロシアの官憲に捕へられ、釋放後、その監視の下に營口に來たものであるとい

うて破顔一笑、本多は大いに歡待したといふ。それから山田は山東に向ひ、小越は、さらに滿洲奥地の視察に上つた。しかして、翌春北京に來たら、本多は、營口から北京に轉勤して來てゐたので、再會をよろこび、ロシアの滿洲經營の實狀を聽取した。偶〻、その頃外字新聞にロシアのハルビン經營の記事があつたので、わが公使館では、その實情調査の必要から、小越にそのことを委囑した。かれは直ちにこの冒險行を快諾し、親しくハルビンの實勢を調査して歸り、詳細な報告をしたけれども、邦人にして、ハルビンを訪れた最初の人は、恐らくかれであらうといはれてゐる。これによつて、わが朝野が、ロシアの野望の啻ならぬものであるといふことを知り、對露問題に對し、特別の關心を寄せるやうになり、對露强硬の輿論が漸次昂揚せられるやうになつた。四十年の回顧も、感慨無量である。

日露の役にも、日獨戰にも、かれは軍に關係して功を樹ててゐるが、かれの眞面目は、さういふ方面におけるよりも、寧ろ支那探險家としての方が、遙かに相應はしいものがあつたやうである。滿洲、蒙古はいふに及ばず、三度三峽の險を越えて四川に入り、蜀棧を通り、雲南、貴州から、甘肅、青海に至るまで、その旅程延長は數萬里に上つてゐたらう。大正六年の夏、黄河をはじめ、北支の諸川が氾濫して、未曾有の洪水となつた。その慘禍を目擊したかれは、支那百年の大計、民生を救濟するの道は、唯一黄河の治水にありとし、これから黄河の踏査探檢を終生の事業とした。黄河流域は、支那文明發祥の地である。黄河と揚子江、これは支那の政治、經濟、文化の各方面と密接不可分の關係を持つものであつて、その意味からしても、その流域を踏査し、その流域を究めようといふのが普通であるが、かれの發心の動機は實に人類の救濟といふ清く、美しいものにあつた。さればこそ、すでに齢五旬を越え、物質的に餘裕もなかつたにも拘らず、狂人だ、妄想家だと嘲笑されながらも、そんなことにはとんと氣にもかけず、黄河の河口から始まつてその流域をとぼとぼと步き、寧夏を經て、甘肅からさらに青海にまで踏み入り、水源に近いところまで辿りつくことが出來たのである。

大正十一年の夏、今度は蘭州から、筏にのつて黄河を下つた。ところが、途中灘にふれて筏が解體し、危く死すべきところを、奇蹟的に救助された。

しかし、このことによつて病を得、かつ積年の疲勞によるものだらう、寧夏につくと全く人事不省に陥り、さらに激烈なる下劑を服用したために全身不隨の奇病になつて動くことも出來なくなつた。空財布を抱いたまゝ重患に罹り、奥地に呻吟せねばならなかつたかれとしては、身も心も堪へられぬやうな苦惱の日がつづいたことであらうが旅費の補給は、在北京の小幡公使の義俠によつてなされ、また月餘の靜養によつて、不思議にも九死に一生を得、無事北京に歸るを得た。それから故山に歸り、朝野の識者に黄河治水の重大性を强調し、さらに病癒ゆるをまつて重ねて黄河流域の踏査に向ひ、研究の足らぬところを補ふのだといふてゐたが、不治の病は、この特志の老翁をして再び起たしめなかつたのである。

遺著に『白山黑水錄』『陰謀家袁世凱』『黄河治水』『禹貢辯疑』等がある。黄河治水は、かれの生前、昭和四年に出版せられたものであるが、當時は、何人も黄河の問題などに注意せず奇を好む一老人の自慰なりとして敢て顧みるものもなかつた。今日、若しかれが健在であつたとしたら、世人は、かれをいかに見るか、思へば、變る世の中である。（筆者は大每東日北京支局長）

北支の果樹

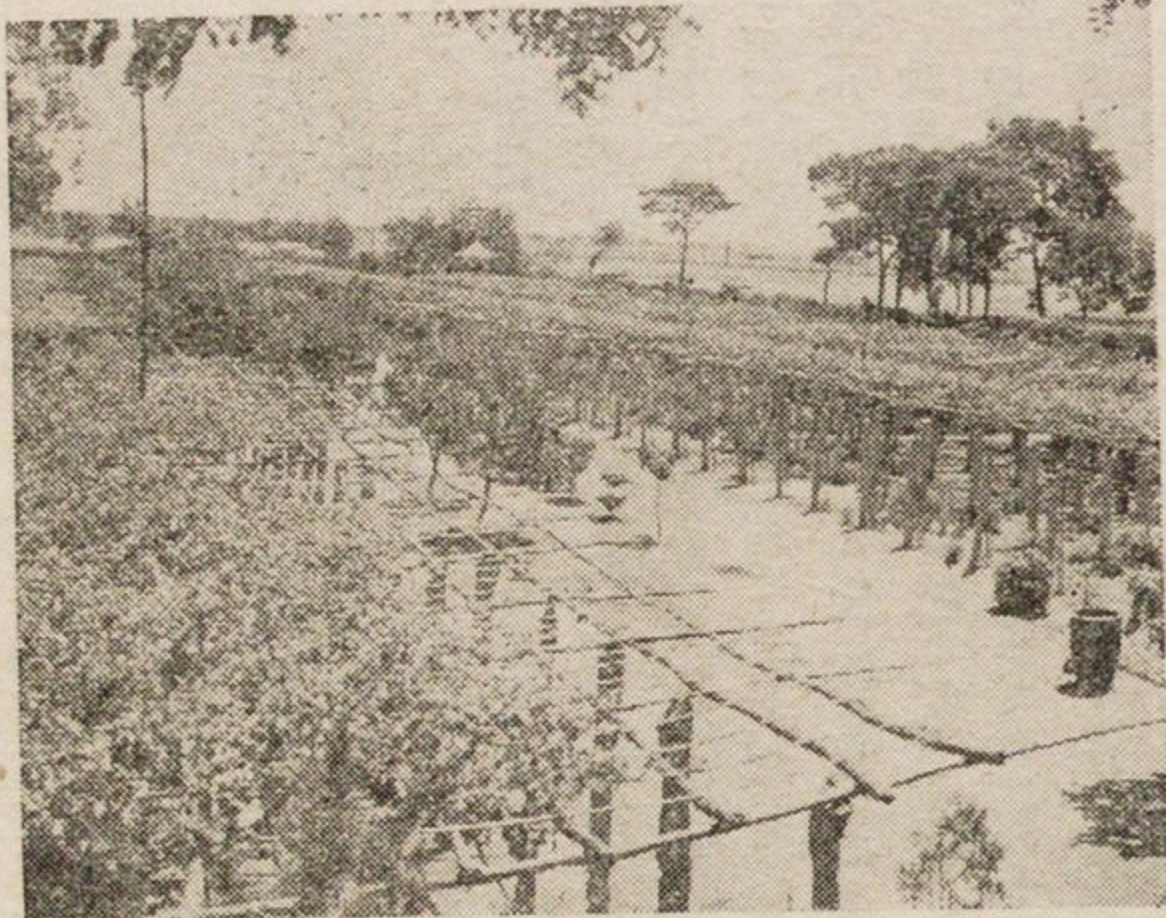
みづの・かほる

果樹に關するその道の學者は、溫帶果樹の發祥地、卽ち原產地として世界に二つの地帶を擧げてゐる。その一つは北支であり他の一つは南歐である。その意味に於て今回は讀者と共にわが北支の果樹をたたへてみよう。

現在北支の山野に見る果樹の多くは北支原產の果樹であるが、何分にも悠久五千年の歷史を有する北支のことであるから、果樹も亦その長い歷史の間に或は增殖され、他に移殖され、或は改良され、或は古き時代に北支外より渡來し、それが今日では恰も鄉土果樹になりきつたものもあらうし、又最近移入されたハイカラな果樹もあつて、現在の北支の果樹が、みながみな北支の原產果樹でないことは、今更云ふまでもないことである。

北支の原產果樹として今日までに知られてゐるものは、杏、桃、梨、柿、棗、栗、支那櫻桃、山楂子、在來林檎の九種で、一般には北支の鄉土果樹だと思はれてゐる葡萄、胡桃、柘榴は、西域卽ち中央亞細亞より、李は中南支より渡來したものである。

尙、序に南歐原產では洋梨、歐洲李、葡萄、無花果、橄欖、榲桲、胡桃、櫻桃等が擧げられてゐる。

これら北支原產と、南歐原產の果樹の交流は、西曆紀元前から、中央亞細亞への廻廊ともいはれる陝西、甘肅を經由したもので、植物學者はこれらの果樹を北支へ移入した男を漢の張騫だと、常にこの人物を引き合ひに出して重荷を負はしてゐるが、これが眞實だとすると、張騫は北支の果樹の大恩人だと云はなければならない。

昌黎農場の葡萄園

さて、果樹は何と云つても、その地の風土が第一だが、その點北支の風土は一言に盡せば溫帶果樹の生育に最も適してゐるといつていいのである。このことは原產果樹が豐富であるといふ事實を見ても、充分うなづかれることであるが、これをも少し學者振つて北支の果樹の生育上、北支の風土の特徵を擧げてみると

（一） 夏季の高溫は果樹の生育に適する。

（二） 雨量が少く日照りが多く大氣が乾燥してゐるので、果樹の栽培に好都合である。

たとへ七八月の候、多雨ではあるが、それは短期間であり、又雨後は比較的乾燥する。更にこの季節を過ぎると、晴天が續き、果實の登熟には、うつてつけの天候である。

（三） 冬季は寒冷である。しかしこの程度の寒冷は、溫帶果樹の生育にはこれといふ被害を見ない。ただ、この冬季の寒冷によつて、北支では南歐に見る濶葉常綠果樹（例へば、枇杷、橄欖の如き）の露地栽培は不可能である。

（四） 北支の土壤である黃土は理學的に見て至極果樹の好む土壤である。

かやうに北支は、果樹の適地で、事實到る處に豐富な果實の生產を見てゐるにもかかはらず、吾々日本人から見ると、さう學者が賞する程感心すべきものを見出し得ないのは、一體何が故であらうか。

私は先づ

（一） 北支の果樹栽培は北支の一般農作物の耕作より更に原始的なもので殆ど自然にまかされ、品種の改良や、肥培數理が加へられてゐない。

そこで折角いい果物も蟲が喰つてゐたり、肥料がきいてゐないので、甘味がのつてゐなかつたりするといふわけである。

（二） 北支では、大部分は未熟果が販賣され、枝の上で完熟さしてから採收するのは、特殊な果實に限られてゐる。從つて一部の果樹を除く外は味の眞價をうかがひ知ることが出來ない。

なぜ未熟果を採收するかといふと、それには

（イ）貧農は急いで金に換へたがる

（ロ）盗難を恐れて採收を急ぐこと

（ハ）輸送並に販賣機構の不完全なことから供給者から需要者の手に入るまでには、長日子を要すること

（ニ）未熟果は習慣として需要があること

等々がその理由としてあげられる。

（三）支那人は比較的淡泊な風味をもつ果實を好み、日本人は特に甘味が強く、濃厚な味を好む。

日本人には全くかへりみられぬ果實が、支那人に案外好まれるといふやうな事實は、一つに兩國人の嗜好の相違の然らしめるもので、ことに主食物の相違が、果實の嗜好の上に大分影響してゐるやうに考へられる。

（四）支那人は果實を後熟さしたり貯藏したり、加工したりして喰べることを好むが、日本人は採收したての新鮮な果實を珍重する。

（五）日本人の潔癖性が、北支の果實の眞價を玩味し得ないで、多分に喰はず嫌ひで過してゐる。

以上のやうな理由で、果樹の栽培には、日本の風土が、むしろ北支のそれよりも劣つてゐるにもかかはらず、今日の日本の果樹栽培は、技術的に素晴しく發達して、日本人の嗜好に適する優良なるものが生産され、それを味つた國で、そしてそれを見た眼で北支の原始果樹を比較するから北支の果樹は一層味がまづくなり、つまらなく見えるのでもあらう。それでも一とたび肥城の桃、南口の柿、泊頭の梨、宣家の葡萄等々を口にせんか、北支の果樹の捨てがたいもののあることに、流石の日本人も一驚するのである。

又更に、現在歐米諸國でもてはやされてゐる果樹のなかでは、以前、宣教師などが、北支の田舍から見出したものを、それを彼の地で改良されたものがあることや、日本で四苦八苦してどうしてもものにならぬ罐詰用の黄肉の桃が、冀東地方で安々と栽培されてゐることや、日本では又溫室でしか栽培が出來なくて、百匁何圓といふ葡萄がこの北支では露地でたやすく栽培されてゐることなどを聞かされたら、まだこんなことを御存じのない讀者は、きつと北支の果樹を、なるほどと見直して貰へることと思ふ。

だが、所詮は今のところ北支の果樹は、殆ど改良されてゐない野育ちの果樹である。たとへ北支の豐富な果實も質に於て外國には勿論、日本産には遙かに及ばないのである。

この罪はもとより北支の果樹自體の罪ではなくて、罪は栽培する北支の百姓にあるといふべきである。今後先進日本の果樹に關する技術を以て、これを改良發達せしむるならば、それこそ北支はその原産地たる名に反かず、溫帶果樹の王國となるであらうことは、旣に多くの專門學者の斷言してゐる所である。

ところがその北支の果樹の改良に最初の一石を投じたものは滿鐵であり、それは今日華北交通會社の產業附帶施設として經營してゐる中央鐵路農場昌黎分場であることは、知る人ぞ知るところである。

抑々本農場は、昭和十一年三月、當時北寧鐵路管理局長殷同氏（現華北交通會社副總裁）が、鐵道背後地產業助長の目的を以て、昌黎附近に於ける果樹栽培の改善振興を企圖し、時の北支駐屯軍顧問吉田新七郎氏の盡力により滿鐵の技術的援助を受け、昌黎に昌黎果園を開設したのが本農場の濫觴で十三年一月これが内容を整備し、果樹の他、蔬菜及び病蟲害防除に關する試驗研究、優良果樹の苗木の養成配布をも行ふこととし、年とともにその充實を見てゐる。（筆者は華北交通會社資業局參與）

烙餅と蟹

勝又温子

「蒸餅、烙餅、繙過來、餡兒餅」

北京の子供も近郊の田舍の子供も此の一句を面白く節付けて歌つて遊ぶ。二人の子供が兩手を結んで左右に振りながら此の歌で調子をつけて、最後にくるりとくぐつて元の位置にもどる遊びで、日本でもよくやるものであるが「繙過來、餡兒餅」で上手に、しなやかにひつくりかへる支那の子の相手になつて居ると、何度繰り返しても何だか面白い。

元來「餅」の種類は非常に多く、簡單に說明することが出來ないが、とにかく支那の餅は子供にも大人にも切り離すことの出來ない必需食物であると共に厚い鐵の平鍋でひつくり返しこつくり返し燒く餅類の香味は、支那生活の色んな情緒をも經驗させてくれる。

「餅」は日本語なら「モチ」で、若し支那にも餅があるかと、字で書いて中國人に見せれば必ず「有る有る。毎日食べてゐる」と答へるに定つてゐる。

支那語で云ふ餅の意味は、圓くて平たいものの事で、日本なら「お盆のやうなお月樣」も、こちらの子供なら「餅のやうなお月樣」と云ふわけである。「ピーン」と聲を落して長く引つ張る處に又、字で表はせない氣分がある。

餅にも、大きいものばかりでなく小さいものも澤山ある。

烙餅の烙の意味は燒くと云ふ意味でメリケン粉を平たく丸くのして燒いたもの、即ち烙餅で、此の二字で名詞にもなり、又、烙を動詞に使へば餅を燒くと云ふ意味にもなる。

烙餅とは、數多い餅類の中の一種になるわけで、そして又餅を廣く代表するものでもある。

造り方は、メリケン粉をこねて、のして油と鹽を塗つて捲き直し改めて丸くのして燒くので、薄いきやしやなのはパイの皮の樣に何層かに分れておいしい。大きなものでは直經一尺五寸もある素晴しく大きな厚いものもある。之等は多く苦力相手に店先き又は露店で燒いて切り賣りをするが、その傍には大抵油で揚げたものとか、漬物を糸切りにして油をかけた物等を賣る者が居るのが普通である。

尚、豆汁兒と云つて綠豆の汁を醱酵させた甘酸つぱい汁を賣る者もほぼ附きもので、一碗の豆汁を飮み此の大きな烙餅を半斤とか一斤とか切つてもらつて漬物相手に路傍でお腹を充たす職人や車曳きの姿は北京のどんな隅々に行つても眼につかぬことはない。

烙餅の中に入れるべき「餅」にも色色なものがある。肉餅とか餡兒餅、葱花餅、糖餅等言つて、肉を入れたり、野菜と肉の餡を包んだり、刻んだ葱や砂糖を入れたもの等、何れも優れた主食、或は主食兼副食である。

季節とこの野菜によつて餡兒餅の中身が變る事も面白く、「繙過來、餡兒餅」で、ひつくり返る子供の遊びの面白さも餅にお馴染みの人でなければ判り難い。又汁の多い瓜や絲瓜等を初めから粉の中に入れて練り、其の汁だけで水を加へぬ榮養たつぷりのもの等あり、しかも野菜の違ひや、一寸した造り方の差で又色んな獨立した名をつけられて居るもの等も民間には實に澤山ある。一つ烙餅に屬するものと云つても複雜多樣で味ひ切れるものではない。

今一つ、烙餅の一種で特筆すべき物は、薄餅でこれにも又片兒餅＝片兒火燒、春餅等、多少意味の違ふ別名があるが、とにかく麵を熱湯でこねて薄く上品に燒く方法である。烤鴨子に出て來るお馴染みのものであるが、これが新春のよき野菜を壽いで包んで食べる立春の行事には、春餅となり、春餅の一卓は、誠に一家近親知友の團欒に床しいものであるが、惜しいかな相當古く北京に住む日本人でも、古風な漆塗りの器に詰めた美しい肉の重詰を取り寄せて、色々な野菜や野の草等を揃へて家庭で春餅の一卓を圍む事を知る人が少い。

此の他、烙餅一族以外の、凡そ餅と名づくるものを擧げたら隨分あるであらう。燒餅、油餅、果餅、牛舌餅、蒸餅、發麵餅等、揚げたり蒸したり、燒いたり胡麻をつけたり、パンの樣にふくらしたもの等、皆面白い形をしてゐる。お菓子では月餅をはじめ、玫瑰餅（支那バラ）、藤羅餅（藤の花）等、中の花の味によつてそれぞれ名をつけられた物なども支那の香ひの深いものである。

×

民間主食の烙餅と違つて、食通の眞似をして蟹を論ずることは、苦手である。

支那に於ける蟹は古くから風流美食の對象となり、右に蟹、左に酒杯の譬は贅澤家の理想、男子の本懷を示すものと言ふに到つては一層困つて、古い本を見る。

燕京歳時記に「重陽の時に、良鄕酒を糟蟹等に配して是を嘗むれば最も甘美とす」とあり、飯善正要、食物利害の條にも「蟹は八月以後食すべく、餘の月は食す勿れ」とあり、舊曆九月のものとされてゐる。

蟹の種類の多いのは、日本を第一とし、支那でも數種はあるらしいが、普通ここで問題にされて居るのは川蟹で日本の津蟹の事である。北京で蟹、蟹と騒ぐ頃、看板には「新到勝芳傍蟹」と貼出され、天津の勝芳鎭あたりから來るものを第一とする筈であるが、實際は城外の近郊から來るのが殆どである。南郊あたりには泥水にウヂヤウヂヤと居ると聞く。而もそれさへ一流の飯館子に良いものを取られ、市場あたりで私達の手に入るのは大分小さく、尚ほ一段下つて町に賣りに來るものともなれば、哀れにも小さく、榮養不良である。

蟹食中の美味と云はれるものに醉蟹と云ふのがある。生きた蟹を酒に鹽と明礬を入れた中に浸して密閉したもので、天下の珍味とするが、不幸にしてお馴染みが薄い。

最も普通の食べ方は生きたまま蒸すか、淡鹽水で茹で、むきながら食べるのであるが、又身を出して酢で和へたり、炒めたり、麵の皮に捲いて揚げたりする。

食通の代表者隨園は「蟹は他物を交へず、單獨で食べるのがよく、蒸したのは餘りあつさりするから鹽茹での方がよい」と云ひ、北京風俗類徵には宮眷內臣吃蟹の時は、蒸して五六分出來のものを大勢で嬉々として甲羅をはねて賞美する盛な宴の樣が見えるところを見ると半蒸しの蟹を食べたらしい。

家庭でこれを蒸す時、藁でアンヨをからげ背で結び、逃げ出さぬやうにして蒸す苦勞も又面白いものである。

北京の美しい小姐達が大好物の蒸蟹を上手に而も餘りに巧みに、殘すところなくしやぶるのを見て悲觀した日本男性もある。確にそれ程おいしいものである。

飯善正要や、隨息居飲譜等を見ても蟹の醫學的(?)効能は、をかしい程並べてあり、大したものであるが、現代の榮養分析で云へば多少の沃度を含む特長があるだけでヴイタミンは殆ど無い。矢張り今擧げた本でも多量に食べる事は禁じ、食べ合せは柿としてゐる。若し柿と食べてあたつた時は、丁香、木香で毒を消すをよしともあり、又、柿と食べぬまでも中毒よけには紫蘇汁、多瓜汁、生藕汁、蒜汁、蘆根汁などがよいと云ふことになつて居り、今でも必ず酢の中に生薑の刻んだものを入れてつけて頂く。又食後の手の臭味を消すためには紫蘇汁又は菊の花のお茶で洗ふのがよい。

昔、四川あたりの山奧で初めて蟹を見て驚き、神として祭つたと云ふ傳說を何かの本で讀んだ記憶があるので探したがちよつと見當らない。あのグロテスクな形から考へて、恐らく地方的には面白いこんな傳說でもあるに違ひない。

此處に一つ問題がある。日本の食通に言はせると、蟹のシュンは三四月頃で、シュンとは産卵の前であるから、七八月頃、産卵のため津蟹が淺いところや田の口などに出て來る頃は食べられず、産卵後川に歸る九月頃は蟹の最も瘦せてゐる時であるさうである。

舊曆九月の頃は産卵直後より多少回復するとしても、大した事もないであらう。重陽の蟹とは、捕へやすい時期に過ぎないのではなからうか。

（筆者は支那料理研究家）

支那の女と服裝

藤原英比古

未だ内地に居た頃、私は良くデパートの催物部に遊びに行つた。其の頃のことである。

流行服地や浴衣や訪問着の新柄陳列に備へて、幾十ものモデル人形が用意されてあつた。

安本龜八造るところの和服用の人形にしても、又島津マネキンと稱するバタ臭い人形にしても、それが皆素ツ裸であるのがちよつと他所では見られない景觀を呈してゐた。

處で面白いことは、その何れもが等身大の美人人形でありながら、和服用の若奥樣にしても令孃にしても、その胴に至つては何の工夫もなく只ボソツと長胴に出來てゐて、それに思ひ切り不恰好な短い脚が内輪についてゐる。

これに中形浴衣でも、錦紗の訪問着でも着せると實に上品な恰好になる。

このためには、よく衞生的に問題になる幅廣の帶や、無用の長物視せられる袂の效果を忘れてはならない。和服は長胴の人によく似合ふ。

次に西洋人形を見ると、これは又驚く程胴が短かくて、若し現實にこんな人間があつたら畸形兒であらうとさへ思はれる。

お腹の部分が殆ど無くて、張りのよい胸の下にすぐ出ツ尻が附いてゐる。そして脚の長さと、スラリとした肉附きは流石に見事である。

この人形が婦人洋服を着ると、實に見事な洋裝美人が出來上る。

此等のハダカ人形に隱された人形師の手品も知らずして、ウインドウで見たからとてその人形の服をそのまま胴の長い人が着てみたとて似合ふ譯もあるまい。

女學生の姿

私はそんなことから、今支那婦人の體格を見詰めてゐる。

支那の女は又、日本婦人とも西洋婦人とも違つた線を持つてゐる。

第一、胸圍が狹い。上品な女ほど乳房のふくらみも見えない。そしてやつぱり日本の女よりは出ツ尻の樣だ。

私は嘗てこのことを村上知行氏に話したことがある。氏は、更に「支那の女は、立居振舞にも決して上體を曲げない」と云ふ樣なことも、教示してくれた。

かうした數々の條件に似合ふ服裝は矢張り支那服の大掛兒か旗袍より外はあるまい。

幾百年かの傳統は、何時知らずそれぞれの民族に最も適した衣裳を工夫案出してゐると思ふのである。

×

日本婦人にとつても、從來の服裝は幸ひに恰好に於て最も適したものでありこの點世界にも稀な衣裳美が構成されて來たのだけれども、殘念ながら活動的でなかつた。そして無駄が多くて非衞生的ですらあつた。

永い平和と、そして絕對に強い日本男子にかばはれて來たが故に、日本婦人は活動することが少なかつた。そして段々優美一點張りになつて、今日の和服の型を造り出して來てゐる。

今、全國を擧げて緊張の極に達し、女性も外へ出て或は防空演習に、或は隣組の行事に活躍しなければならなくなつてゐる時に、振り袖の退化とは云へ、まだブラブラと長い袂が邪魔にならないだらうか？

名殘り惜いことだが、これからの日本婦人は、あんな非活動的な着物から離れて、もつと經濟的で衞生的で、而も活潑な服裝に移り變らなければならなくなつた。

さて、洋服を眞似ようか、支那服をモヂらうか。それともモンペを引ツ張り出さうか。

併し日本の娘さん達の體格も近年見違へる程向上して來たことを見逃してはならない。洋裝をして「大根脚」の漫畫を物された時代も既に去つて、歩調も潑剌として延びて來た。

一方、洋裁の技術の發達も目覺しく、このために、アツパツパから清涼着、更に簡單服の域を脱して程良き服が仕立てられるやうになつた。

この邊で、もう現代及びこれからの日本婦人にピツタリ合ふ、謂ゆる翼賛型の婦人服が登場してもよいではないか。

×

さて、支那の婦人服である。

小汗巾と褌袴——これがシユミーズとズロースに相當する。そして上衣とズボンは卽ち小褂兒と褲子である。

小褂兒が綿入の小棉襖になつたり又汗衫になつたりするのは氣候に順ずるだけで大體恰好に變りはない。

勞働者や下婢はこのままの姿で外出もする。

併し、女のズボン姿といふものは、舞臺とか乘馬とかの特殊な場合を除いては餘り好感の持てるものではない。

モンペにしても褲子にしても腰から脚への線が非美術的である。

これを隱すために、スラリとした大褂兒を着るのが普通の婦人、娘の服裝である。

都會地の女は、褲子を膝のあたり迄短くして——洋裝の影響であらうが——ストツキングをあらはに大褂兒の下から覗かせて歩く。更に夏季に於ては、モダンな女達は袖の無い旗袍を着る。思ひ切り短いスカートの下に、太股まで露はにのぞかせて、サンダルなどを履く。素晴らしいワンピースの姿である。

冬は冬で、大褂兒の上にオーバーやスワガーを着る。斯くして支那服本來のスタイルを壞さずに、而も洋服の良さも充分利用して、スマートな服裝美を顯現する。

帶も釦も無い。折ひだやギヤザーも無い。それでゐて整然としてゐる。

支那の女性が、なかなか洋服を着ようとしない自信も判るではないか。

あらゆる角度から見て、支那の婦人がこの服裝を持つことを、今最も行き詰つてゐる日本婦人の服裝から考へ併せても、實に羨ましい限りである。

棺異聞

小幡義治

張阿木

張阿木は十九歳だといふが、小柄のせゐか、どこかまだ大人になりきれないものが多分に殘つてゐた。坊主刈にした頭は、高い額を一層高く見せ、そのため小さい二つの眼が、いささか戸迷つた恰好で、顏の眞ン中で瞬いてゐる。無口で、命ぜられた事は一通りやるが、何を考へてゐるのか判らぬと云つたところがあつた。

私が石牌胡同の宿舍に移つた頃、張は弟と二人（彼等は孤子だつた）で、宿舍のボーイに住込んでゐた。

事變前には、宋哲元麾下の某旅長が住んでゐたとかで、この宿舍は洋風、支那風取り交ぜて二十幾つかの房子があり、邸內には磚敷きの院子の他、表門から內玄關までが五六十間もある廣い庭になつてゐた。

或る朝、私はこの庭を横切つて門の近くまで來て思はず立止つた。

「何だ？　あの納屋の中にあるのは」

門の土塀で倒れるのをやつと支へられてゐるやうな納屋だつた。いつもは閉つてゐる古い扉が半開きに開いて、薄暗い奥の方で、大きい黑光りのするものが私を惹きつけたのだ。後から跟いて來てゐた張が、いきなり私の側をすり抜けて納屋の中にとび込んだ。そして、私のために扉を內側から開きながらニヤリと笑つた。

「一個二千圓以上もします。素晴しいでせう」

納屋の中は、仄暗く、陰氣だつた。ひやりとする沈んだ空氣のなかに、長さ一丈餘もある大きい黑塗りの寢棺が低い臺の上に置かれてあつた。

「二つもあるぢやないか」

「ええ、一つは太太の分ですよ」

張は、自分の物ででもあるかのやうに云つた。

棺は、ずつしりと石棺のやうに重々しい。頭の方が高く——二尺以上もあつて——五六寸の厚味をもつた長い蓋がのつてゐる。その蓋をちよつとずらせて、中を覗き込みながら張は小鼻をうごめかしてゐる。南方に産する香木なのであらうか、近づけた私の鼻先にもあるかなしかの芳香が漂つてきた。

恐らく張の云ふやうに、この二個の棺は、前住者の某旅長が夫人と彼自身の死後のために、千金を惜まず購つておいたものであらう。そして慌しい北京敗退の際、どうにもならず心殘して行つたものであらう。

「好味兒、頂好！」（素適な香だ）

張が獨言のやうに呟いた。放心した指先が、愛撫するやうに黑い木肌を撫で廻し、何時迄も棺から離れないで小鼻をうごめかしてゐる……さうした張を私は無氣味に感じてきた。

そんな事があつて四五日後の或る晩私は外から遲く歸つて來た。早速着替へにとりかかつてゐると、張の弟が藥罐を持つて入つて來た。少年は藥罐を置かうともしないで何かもぢもぢしてゐる樣子だつたが、私が聲をかける前に口を開いた。

「兄さんが晝過ぎからゐなくなつていくら探しても居ない」

血色の惡い小さい顏が今にもベソをかきさうになつてゐる。時計を見るともう十二時を廻つてゐた。

「晝寢すると言つてたので家中探したけれど……」

「よろしい、洋臘（ローソク）を持つて來い」

その時、納屋の中で棺を嗅ぎまはしてゐた張の恍惚とした顏を、ふと私は想ひ出したのだつた。可哀相な少年は私の後から暗い庭を横切つて訝りながらついて來た。

納屋の扉は閉つてゐたが、手をかけると音もなく開いた。しいんとした闇が破れて、すすけた壁に大きい影が怪しく搖れる。

黑い棺が二つ、地底から浮びあがつたやうに私達の前にあつた。

「洋臘をもつと前に出せ」

私の聲は思ひなしか鋭かつた。少年は駭いて私に身をすり寄せてきた。私は二つの棺と暫く向ひ合つてゐたが、やがて手前の一つに近づいた。重い蓋が少しずれてゐた。それをぐんと力をこめて押しやつた。黃色い光が棺のなかに流れ込んだ。と同時に棺底から張阿木の高い額が、靜かに閉ぢた瞼が、色褪せた唇が——ミイラのやうに肩をすぼめた半裸の臥身が、眼の前にうかびあがつた。

二三日すると張は又元の身體になつてゐた。だが、以前よりも一層無口になり、この出來事については、それが晝寢中の過失なのか、それとも他に意味があつたのか、つひに一言も語らう

としなかつた。

それから間もなく彼は或る會社の給仕にかはつていつた。私はまだ一度も彼と會はないので、その後どうしてゐるか知らないが、何かの折に張阿木の事を思ひ出す毎に、私は考へるのだ。

〃あの晩、發見されずにゐたら、俺はあの立派な棺の中で、永遠に眠れたのに……〃

或はそんな風に恨んでゐるかも知れないと。

老婆

山東省博山から南東に五六里はいつた馬庄といふ部落に、〇〇部隊が進駐して間のない頃だつた。

一月の終りで遠い山々には數日前に降つた雪が、まだ縞模樣に殘つてゐて凍りついたやうな空の青さが、嶮しい山容を一層きびしく見せてゐた。

夕暮近かつた。山峽をうねりうねつてこの馬庄の或る小さい盆地に出ると急にのびのびと河幅も廣くなつた淄河が、白い帶のやうに遠くまで續いてゐる。

すつかり水の枯れた河床には、細い裸の枝ばかりになつた白楊の疎林が灰色にけむつてゐる。その林の中からカツンカツンと冴えた音が聞えてくる。

私は河床に下りた。そしてその音の方へと、まばらな白楊の林をぬけて進んで行つた。冷い空氣が肺に沁み透るやうで、木の幹をすれすれに通る時にも、まだ春の匂ひは感じられない。やがて人影が動いてゐるのが見えるところまで來た。

堅い石灰岩の小砂利を踏む私の足音を聞きつけたのか、銃劍を小脇にした兵隊の視線が遠くから私を迎へた。

防寒帽を冠つたのや、大きい手袋をはめた四五人の百姓が、白楊の根元に斧を打ち込んだり、倒された幹に跨つて鋸を動かしたりしてゐた。

近づくと、兵隊はトラックの上で一緒だつた顏なじみの一等兵だ。

「昨日から、自分は現場監督をやつとるです。橋を架けるのに材木がいるので村の者に伐らせてゐるところです」

若いが話好きの兵隊だつた。百姓達の仕事を指圖したり、時々周圍に監視の眼を向けながら彼は話しはじめた。

「昨日の今頃でした。何本か伐り倒して最後の一本を半分程きつた時です、不意にうしろの方で嗄呀！嗄呀！といふ叫び聲が聞えて來ました。驚いて振り返ると、白髮まじりの老婆が轉びさうになつて驅けて來るのです。何事だらうと思つてゐるうちに、そばまで來ると、いきなり伐つてゐる木の幹に抱きついて大聲でわめきはじめました。怒つてゐるやうでもあり、哀願してゐるやうでもあり、呼吸も絶えだえにわめいてゐるのです。百姓達は、みんなその木から離れて呆然と立つてゐました。はじめ、自分には何の事かさつぱり判りませんでしたが、そのうち一人の百姓の説明で婆さんが〃どうかこの木だけは伐らないでくれ〃と泣き叫んでゐるのだと解りました。

〃私はもう老い先き短いのだ。私は苦しい一生を送つて來た。しかし死んだら棺だけはこの木で立派に造つて這入れると、そればかりを樂みにして生きてゐるのだ。

この木は他のどれよりも早くぐんぐん大きくなつた。あと一年もすると立派な棺が造れると喜んでゐたのに……この木を伐つてしまふなら、私を殺してくれ。息子は死んでしまつたし、もう生きてゐる甲斐がない〃と繰返してゐるのです。そして木の根元に抱きついたまま何時までも離れようとしません。仕方なく別の木を伐らせました」

それから靜かに附け加へた。

「多分、あの木は、枯れてしまふでせう」

（筆者は東亞新報經濟部次長）

可園雜記

加藤新吉

支那家屋の廣さを表はすに幾間房子といふ。間は長さではなく柱間を謂ふらしい。同じ一間でも王宮とか親王府とかいふところのは廣く一般民家のは狹い。前清の官吏の住宅だつた可園はその中間に位する。私の住んでゐる部分に就て云へば、一間は間口十尺奥行十五尺位。一棟は三間又は五間より成る。院子の正面の私共が正房としてゐる一棟は、奥行十七尺の所に柱列があり、更に四尺だけ延びた廣目の三間房子である。坪にして凡そ十七坪半。

斯うした古い家屋の形を變へず、なるべく其儘に使ひたい、と私は考へたのであるが、今迄の日本人の生活様式で急に疊を全廢することは不便であり不經濟である。仍で何の棟にも概ね三分一だけ疊を入れた。正房も一間だけ床を上げて七疊を入れると、壁際に細長い隙間が殘る。そこは板敷にした。雨季、黒煉瓦の壁は濕氣を吸ひ上げて疊を腐らせる。壁際の板敷はその意味からも必要である。一方に簞笥戸棚、窓際に小机とシンガーミシン。前に云つた奥行の延びたところに布を懸けてその奥が簡易押入。僅に以て脚を伸ばすに足る廣さ、ここが家人の居間兼仕事場兼寢室。

殘の三分二は在來の磚の床の儘、その上に防濕紙、その上に絨氈を敷き、一隅に机、中央に洋風家具を配し書齋兼應接室に使ふ。周圍は書架、疊の間との界も別に作らず書架で代用。書架合計十二、それを見れば會はずとも主人の人となりが判ると友人が笑ふところの雜書が雜然とこみ合つてゐる。書架の上には漢籍を積上げる。近代日本の書籍と歐米の書籍とは書架の中に相鄰して親善關係を結んでゐるが、和書と漢籍とはその中に立つを好まず、書架の上に重なり合つて別個に民族融和をやつてゐるのである。

この混雜と狹隘とに更に輪をかけるかの如く古戸棚が二つ、中は陶瓷の見本、といつても、うちの老爺は疵がなければ好かぬのかと厨子が家人に質した程に疵物と破片ばかり。金がないからである。だが、支那哲學の隣が日本文學でその隣が鐵道交通でその隣が希臘建築でその隣がシベリア地理でその又隣が印度佛像で又又隣が天文學といふ書籍の無軌道ぶりと見較べて、蒐集が明代靑花に限られてゐるのは感心だと、變なほめ方をする人もないではない。

實のところ、最近まで靑花すなはち染付が安かつたのである。ところが今日無闇な値をつけ出した。滅多に手を出すと足を出す。そこで主人いささか方針を變更して宋瓷の破片と現代民窯に乘換へつつある。いまその過渡期であるからこれといふもののあらう譯はないが、一群の定窯の破片は貴重するに足る。これは今春、小山富士夫氏がその窯趾を發見し彈丸を冒して拾つて來られたもの、手にする毎に鐵兜をかぶつた命がけの彼を思ふのであるが、在支速成愛好家連に見せても餘り感心したやうな顏をしてくれない。

現代民窯は一昨年旅先で博山窯を集めたに始まり、類は友を呼んで五錢、十錢、高きは二三圓といふ各地の粹が集りつつある。旅行の度に何かさうした土産を持つて來て吳れる吉田璋也氏の如き篤志家を友人にもつてゐることも、主人の道樂と主人の書齋の混雜とを助長するに役立つてゐる。

（筆者は華北交通資業局長）

支那關係圖書紹介 1

ある地域の文化を研究しようとする人にとつて、一應その地域の自然と文化の全般に亙つての大觀が必要であること言ふ迄もない。而してその大觀は地理と歷史の手段に賴るのが捷徑であると言ふ立前から先づ支那地理の參考書を物色してみる。尤も地理又はその關係科學の專門的な文獻や紹介しても求め難い資料は成る可く問題外にして常識程度な一般人が支那地理を讀んでみるのに恰好なもので、現在尙入手されさうな範圍での物色である。

一 自然地理關係

1、地質と地形

大每で編輯した〝大黃河〟の中の山根博士の記載は、先づ讀まれていいものである。惜むらくは記述が固いのが難點だが、どうせ今の處外に平易な面白い書き方のものがないので、當分我慢して貰ふより外ない。

昨年の秋、日本評論社から出た〝支那地理大系、自然環境篇〟には支那の地形、蒙古の地質と地形、西北地區邊境の地形などがあるが、京城帝大の〝蒙疆の自然と文化〟の地理的に見た蒙疆や地質と地下資源の項と同樣執筆者が大陸の實地の經驗淺く、資料の涉獵も不十分な點を痛感する、從つてまとまりがよくない。一般的なものを書く執筆者はより好く整理された人であつてほしい。同書中の支那の鑛物資源と支那の土壤は比較的無難である。前者は摘要として利用されるに便であるが書き方は面白くない。一般地質との關聯性や鑛質に就て簡記しつつ面白く（その科學性に興味を起させつつ）讀ませる樣なテクニクがあつたらと慾を言ひたい。後者の支那の土壤はソープの著述の抄錄といふ程度であつたから、却つて過つことがなく手際よく見えるが憾みとする處は、その執筆者は土壤學に就いて何れ程研究されたかなと言ふ物足りなさを感ずる。元來土壤地質學の良き邦書に惠まれてゐない一般讀書人に支那の土壤に就いて說明を直接することが飛躍であることを考へてもらつたら、高踏的な術語、符號に註も加へずに用ひる樣なことは出來ないだらう。敢てソープの抄譯摘錄に止まると許するわけである。

土壤地質では別に岩波からソープの支那土壤地理が出てゐる。この原書はもつと早く紹介さるべくして、日本の先生に知られることの甚だ晚かつたものである。嘗つてこの本について日本の古い土壤地質の學者に聞いたら全然御存じなく、只徒らに黃土の肥沃さ、支那の耕地の廣大さのみ强調して講義を糊塗してゐた。この時程日本の學者の支那智識の貧弱さを情なく思つたことは無かつた。日本では獨逸や露國の斯界にのみ注目してゐて近來米國に於ける動向には注意が足りなかつた、その米國派の學者が支那の指導をしてゐることは尙更氣にしてゐなかつた。

斯の書の譯出には可なりの努力が拂はれてゐる樣であるが、原書は今や極めての稀覯書に屬し、余の知る範圍では北京にも一部しかない。店頭に見參するものは東安市場の爺達が出資してレプリントしたもので、ミスが多く圓版はまづい。譯者の用ひられたのもこの種のものと思はれる節があり、原著者に一寸氣の毒な氣がする。

他に地理關係の叢書中に地質方面の記述を見るが、概ね教科書式で新鮮味面白味といふ樣なものがなく、內容も甚だ貧弱である。これは從來の日本の學者が支那を研究してゐなかつたのに出版業者がキハ物漁りから無理に學者を動員したことから來た結果である。

地質圖では東京地學協會編輯の東亞地質圖が日本では唯一のものであるが既に古く其の後の智識はあまりに進んでゐる。これが代用には現地の古本屋で〝黃河志第二編地質誌略〟を求められるがいい。それには華文だが華北の地質についての極く概略が說明されてもゐる。ただ察南と晉北が缺けてゐて一寸不便だが今の處これに越すものはない。

昭和十六年九月十五日印刷納本
昭和十六年十月一日發行

十月號
（每月一回一日發行）

編輯者 北京・華北交通株式會社資業局 加藤新吉
發行者 東京市麴町區三番町一 長谷川巳之吉
印刷者 小石川區久堅町一〇八 共同印刷株式會社 大橋松雄
發行所 東京市麴町區三番町一 第一書房
振替東京六四二二三番
電話九段(33)一一四一五番 三三四四番

一册定價㊇三十錢（郵送料一錢五厘）
一ヶ年分 金三圓六十錢

廣告取扱
一手取扱所 大阪市西區京町堀上通一丁目二五 一新社
電話土佐堀九三九

第一書房戰時體制版　各七十八錢

吉田松陰の精神
陶山務著

二刷一萬五千部増刷中!!

松陰の重要な章句を選び、昭和維新の日本人が松陰にまつべきは何かを究明す!!

デュラント 哲學夜話
陶山務譯

四刷一萬二千部出來!!

小說の如く面白くギリシヤより現代に至る大哲の思想を萬人に說いた劃期的著作

ヒットラア 我が闘争
室伏高信譯

十四刷一萬七千部出來!!
全總數三十二萬六千部!!

獨ソ戰の勝利を說く本書は米陸軍大學の教科書として使用された!! 大増刷出來!!

增補改訂 禪學讀本
山田靈林著

改版初刷二萬部

禪學とは決して難解なものではない。誰にでも味へる禪の妙境を傳へた禪學の入門書である本書は、同時にまた慈味あふるる人生讀本として讀むに好適の書だ!!

日本新興報德の實行力
東京文理大助教授　加藤仁平著

一刷一萬五千部發賣中

新體制下の國民生活はいかにして革新さるべきか。その理論と實際が此處にあるのだ!! 報德精神こそ新日本人の主張だ!!

東京市麹町區三番町
振替東京六四二三三

昭和十四年七月四日第三種郵便物認可 昭和十六年九月十五日印刷納本 昭和十六年十月一日發行（毎月一回一日發行）第二十九號

北支 定價三十錢